

# 京都の祭り・行事

— 京都市と府下の諸行事

京都の祭り・行事  
— 京都市と府下の諸行事

京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会

## 凡 例

- 本書は、京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会が普及啓発事業として平成 31 年度（令和元年度）に実施したパネル展示の図録である。
  - ①令和元年（2019）10月1日（火）～10月11日（金）  
ゼスト御池〔寺町広場〕
  - ②令和2年（2020）2月4日（火）～3月6日（金）  
京都府立京都学・歴史館〔京都学ラウンジ〕
  - ③令和2年（2020）2月4日（火）～3月2日（日）  
京都府立山城郷土資料館〔ロビー〕
- 本書の編集は、福持昌之（京都市文化財保護課技師）が行った。
- ゼスト御池での展示では、京都大学（エコ〜るど京大）と京都市（文化財保護課）との共同プロジェクト「こんちきじース〜祇園祭から学ぶ持続可能性。SDGsの先へ〜」の活動紹介のパネルも展示したが、本書では割愛した。
- 本文の執筆については、今中崇文、川瀬俊之、大東敬明、樽井由紀、平原園子、福持昌之、真柄侑、松井朋子、南佳孝、宮澤早紀、向田明弘、村田典生、山本拓人が行い、執筆分担は末尾に示した。
- 本書は、平成 31 年度文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）の助成をうけて実施する「京都の文化遺産総合活用推進事業」の成果の一部である。

# ごあいさつ

京都には、地蔵盆をはじめとした地域の伝統行事が多く残されています。それらの行事がおこなわれる地域社会は、近世の村や町組、あるいは神社の氏子地域など、歴史的・伝統的な人々のまとまりであり、伝統行事は地域のまとまりの象徴であるだけでなく、地域住民の親睦の機会や、地域社会を健全に維持する機能の一部を担ってきました。しかし、近年の社会構造や人々の意識の変化によって、これら伝統行事が縮小されていくという風潮も見られます。

伝統行事には、大きな神社の氏子地域、その氏子地域の中にある小さな社祠を護持する地域、室町時代の町組に端を発する元学区、自治会などの単位である各町、さらに小さな範囲の隣組、といった様々な範囲の「地域」が重複しており、それぞれ多様な伝統行事がおこなわれてきました。このうち、自治会のレベルを例にとってみると、新興住宅地も含めて、京都市には約6,500、京都府全体では約10,000もの自治会があるといわれています。他府県に比べて、京都では地域社会の単位が小さく、たくさんの地域社会が併存しているのです。

文化首都とも呼ばれる京都に多くの文化財が伝えられていることは、一千年に及んで都がおかれていたことや、大きな神社仏閣が多いからというだけではありません。わが町を誇りに思うように、それぞれの地域社会が健全に機能し、かつ多様性が維持されてきたことが、京都における地域文化の豊かさの基盤であり、京都にさまざまな文化遺産が豊富に伝えられてきた原動力なのです。

地域に伝えられてきた伝統行事は、京都に欠かせない地域の文化資源として、地域住民の交流や、地域外の人々との交歓、そして地域のアイデンティティの再確認などの重要な役割があります。昨年度に作成した『京都の祭り・行事—ふるさとの伝統行事を訪ねる』では、主に京都市内の指定登録された無形民俗文化財の紹介をしたが、本書では京都市と府下の伝統行事について、これまであまり注目されてこなかったものも含め、さまざまな角度からその魅力を紹介したいと考えています。

京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会  
委員長 天野文雄

# 目次

凡 例  
ごあいさつ  
目 次

1	京都市の祭り行事	一乗寺藪里の伝統行事……………	4
		地藏院の大般若会……………	5
		久多のどんど……………	6
		宮座行事が今も生きる上一乗寺 — 神弓祭と遷御祭……………	7
		知られざる「御千度」……………	8
		菱妻神社の千種祭……………	10
		宝泉寺のお経くり・虫送り……………	12
		久我神社のお百灯……………	13
		広河原の観音堂での盆行事……………	14
		即成院二十五菩薩お練り供養法会……………	16
		北野天満宮瑞饋祭……………	17
		槌屋町の祇園御火焚祭……………	18
		<b>コラム</b> 民俗文化財としての「京都五山送り火」……………	20
2	府下の祭り行事	囲垣祭……………	22
		宝積寺の鬼くすべ……………	23
		オシマ参り……………	24
		佐古の野神神事……………	25
		口司の虫送り……………	26
		城屋の揚松明……………	27
		石清水祭……………	28
		間人の秋祭り……………	30
		荒見神社祭礼……………	31
		白山神社の秋祭り……………	32
		木津御輿太鼓祭……………	33
		田山花踊……………	34
		<b>コラム</b> 祭りが行われる縁日の由来……………	35
		<b>コラム</b> 「伝統文化親子教室」のすすめ……………	36
3	井上頼寿が残した記録	井上頼寿 — 京都の祭り, 民俗を調べた人……………	38
		井上頼寿旧蔵資料 — 京都の祭り, 民俗の記録……………	39
		やすらい祭……………	40
		木津御輿太鼓祭……………	41
		宝積寺の鬼くすべ (追儼)……………	42
4	資料	<b>資料 1</b> 京都府「祭り・行事調査」とその着眼点……………	44
		<b>附</b> 調査票……………	45
		<b>資料 2</b> 展示の記録……………	46
		<b>資料 3</b> 京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会について……………	48

企画・運営／協力機関 (者) ／デザイン

# 1 京都市の祭り行事



# 一乗寺<sup>やぶ さと</sup>簀里の伝統行事

京都市左京区一乗寺

一乗寺簀里は、比叡山西南麓の高台に展開する旧一乗寺村の3集落(北出・簀里・舞楽寺)のひとつ。八大神社の一ノ鳥居から詩仙堂へ向う道の南北に広がる地域で、現在の町名でいえば、北側の釈迦堂町と南側の門口町に当たる。

簀里で行われている行事は「愛宕講・伊勢講・月念仏・念仏講・汁講」の5つ。その内「月念仏」だけは簀里全体の行事として釈迦堂で行われ、「愛宕講・伊勢講・念仏講」は各町内が当番の家で行っている。以下、行事内容は釈迦堂町の場合を記す。

釈迦堂で毎月15日と春・秋の彼岸に念仏を唱えな



「月念仏」の数珠回しの様子。毎朝、釈迦堂の世話(掃除とご飯のお供えと花の水替え)をする当番が中心となって「月念仏」が執り行われる。

み上げ、再び二礼に拍手一礼の後、御神酒・洗米を当番から順に頂き、式は終わる。その後、直会<sup>なおりい</sup>を行う。「伊勢講」の式も基本は「愛宕講」と同じで、掛け軸と祝詞が伊勢講のものに変わるだけだ。

「念仏講」は釈迦堂町の場合、8軒の各家代表の女性が当番の家の仏壇の前で御詠歌を唱える。行事の性格上、行う日は当番の家の命日に行う場合が多いという。

「汁講」は現在、食事会という形で行うグループが2組ある。もともとは、農家に嫁いできた女性は孤独なうえ、朝から晩まで働きずくめであったことから、誰はばかることなく公に参加できる会を姑たちが嫁たちのために作ったことに始まるという。

(川瀬俊之)



釈迦堂町の町名由来ともなっている釈迦堂は、簀里の産土神である比良木天王と釈迦如来・地藏菩薩が祀られている。

から数珠回しをするのが「月念仏」だ。現在、釈迦堂町の9軒と門口町の8軒、計17軒で受け継がれている。

「愛宕講・伊勢講」も釈迦堂町の場合、9軒で受け継がれている。「愛宕講」は1月・5月・9月の24日、「伊勢講」は3月・7月・11月の16日か、その直近の土日祝日に行われている。

午後7時、式は全員の二礼二拍手一礼で始め、当番の祓詞<sup>はらいことば</sup>の後、愛宕講の時は稲わらを各々約10センチ取り、これを半分に切って、右手のものは左肩越しに、左手のものは右肩越しに放って身を浄める。当番が「愛宕講」の祝詞<sup>のりと</sup>を読



当番の家の床の間には、それぞれの講の掛け軸が掛けられ、三方に御神酒・洗米・塩・盃と愛宕講の時は稲わら2〜3本を載せ、灯明をあげて準備とする(写真は愛宕講の時のもの)。愛宕講は愛宕神社への代参は行っていないが、伊勢講は伊勢神宮への代参は今も続けられている。

# 地蔵院の大般若会

京都市左京区花脊大布施町

大般若経(大般若波羅蜜多経)とは、玄奘三蔵が天竺から唐に請来し、生涯をかけて漢訳した六百巻の經典である。『続日本紀』には、大宝3年(703)文武天皇の時代に、大般若経が転読されたことが記されており、それ以降、多くの宗派で転読法要が行われてきた。大般若経はもともと卷子本(巻物)だったが、江戸時代になると折本(蛇腹状)の経本が流行し、古い卷子本も折本に仕立て直された。折本の大般若経を左手に持ち、表紙を右手に持って低く下げると、左から右へ流れるように経本が移動していく。各地で行われている大般若経転読は、このような所作をしながら、各巻の表題を読み上げるという作法で行われている。

花脊大布施町の地蔵院(曹洞宗)には、長禄4年(1460)の奥書のある卷子本の大般若経が伝わっており、転読法要(大般若会)が行われている。

1月初旬、朝から地域住民によって蔵から本堂へ大般若経が運ばれ、午前10時から法要が始まる。転読は他寺の僧侶も加えた数名の僧侶がおこなうが、経櫃から経本を選び、卷子の紐を解ほどいて僧侶に渡し、読み終えた卷子を預かって巻き直し、再び経櫃に収めるといった卷子本の転読に不可欠の作業は、地域住民が担っている。

法要の途中、住民の代表が経本2巻を袱紗に包み、大布施の鎮守である春日神社へ持参して参拝することや、法要終了後に祈禱済みの板塔婆3枚を、地域住民が手分けして村境(3か所)に立てに行くことから、この大般若会は、単に寺の行事にとどまらず、神仏習合の姿をとどめた、村の1年間の安全を祈る初祈禱の儀礼であることがわかる。

卷子本の大般若経の転読は、おそらく中世以前の転読の様子を今に伝えるものとして貴重であるが、卷子本の大般若経が現存していることと、それを使用した行事が続いているという条件がそろった事例は稀有である。現在、わかっているものとして、右京区京北下熊田町の宝泉寺(毎年7月)、滋賀県長浜市菅浦の阿弥陀寺(毎年2月)、南丹市美山町大字三埜の岩江戸区公民館(平成27年に休止)、左京区久多の観音堂(平成20年頃から折本を使用)と、京都周辺に限られており、いづれも地域住民が僧侶に経本を手渡す作法が共通している。

(福持昌之)



僧侶と住民とが協業する  
転読の作法



←村の境界に立てられた  
祈禱札  
(右は前年の札)



→転読の途中に、  
経巻を持って  
春日神社へ参  
拝する



「大聖釈迦牟尼如来御詠歌」「高祖承陽大師道元禪師御詠歌」「太祖常濟大師瑩山禪師御詠歌」「正法御和讃」が詠唱される

〔実施時期〕 毎年1月15日に近い土・日曜日や祝日(かつては1月15日)

〔実施場所〕 大慈山地蔵院、春日神社、村境

〔伝承組織〕 大布施町の住民

〔文化財〕 未指定

# くた 久多のどんど

## 京都市左京区久多

京都市左京区久多の「どんど」は、久多の5か町合同の行事で、正月のお飾りを焼いて無病息災を願い、1月15日に近い土曜日に準備をし、翌日曜日の明け方に点火する。

準備では、久多中の町の田圃<sup>たんぼ</sup>に10m程の竹を立て、竹の先端には「エビ」と呼ばれるしめ縄を飾り、その年の恵方の方向に向ける。その根元には、各家庭から持ち寄った正月飾りのしめ縄、松飾り、旧年のお神札を置き、その周囲を藁<sup>わら</sup>で囲って縄で括る。さらにその周囲を、茅<sup>かや</sup>で囲って縄で括る。最終的には、高さ6～7mの円錐形に仕上げる。

日曜日は夜明け前に久多の住民が集まり、日が昇る前にどんどに点火する。どんどで焼いた餅を食べると1年を無事に過ごせるといい、焼いた餅を持ち帰って、ぜんざいに入れて食べることもある。どんどの後の炭を踏むとマムシにかまれない、どんどの火で書き初めを舞い上げ、高く飛ぶほど字が上達するといった言い伝えもある。また、できるだけお飾りがそのままの形で炭になったものを選んで家に持ち帰り、御守りの中に入れて「火除けのお守り」を作る風習もある。

昭和55年(1980)頃までは、小正月(1月15日・当時は成人の日)に行われており、しかも久多の5か町(上の町、中の町、下の町、宮の町、川合町)がそれぞれ行っていた。その頃、どんどの準備は、中学生が中心に小学生も協力して作るもので、どんどに使われる藁縄はその場の参加者で縛<sup>な</sup>うことがあったという。(南 佳孝)



前日に作られたどんど



竹の根元に正月飾りを囲う



どんどに集う久多の方々



夜明け前に点火される

〔実施時期〕 1月15日に近い土曜日(準備)

翌日曜日(点火)

〔実施場所〕 久多中の町の田圃

〔伝承組織〕 久多自治振興会

〔文化財〕 未指定

# 宮座行事が今も生きる上一乗寺

## — 神弓祭と遷御祭 —

京都市左京区一乗寺

上一乗寺とは、比叡山西南麓<sup>たかだい</sup>の高台に展開する旧一乗寺村をさす。その産土神<sup>うぶすながみ</sup>である八大神社<sup>はちだい</sup>は、宮本武蔵と吉岡一門との決闘で知られた下り松から、さらに東へ行った詩仙堂<sup>せんだう</sup>の東隣に鎮座する。ここで、4月の第1日曜日(今年は5日)に神弓祭が催行される。

一般には歩射<sup>ふしや</sup>(奉射<sup>ほうしや</sup>・武射<sup>ぶしや</sup>とも)神事といい、悪鬼を祓い豊作を祈る行事で、多くは正月に各地の神社で行われている。上賀茂神社の武射神事が有名だが、大きく違うところは専任の神職が取り仕切っているのではなく、宮座の行事として受け継がれていることだ。

宮座とは神社や村落の神事の執行を担う集団のことで、氏子の一定年齢に達した男子によって構成される。八大神社の宮座<sup>みやざ</sup>は上座<sup>かみざ</sup>16名、下座<sup>しもざ</sup>16名で、それぞれに決められた役割分担を順番に務めて宮座行事のすべてに関わり、やがて宮座の長である督殿<sup>とくでん</sup>(上座の1番)となって、八大神社の行事を取り仕切る(昭和19年以降は専任の神職と共に執行する)。

午後2時、本殿にて祭典の後、境内に張られた大的<sup>おおまと</sup>に向けて、宮司・氏子総代等と宮座の上下の座員がコの字型に整列。御神酒<sup>のみ</sup>と臈<sup>なます</sup>をいただいたあと、宮座の座員の中から、今年から上座になる人と昨年上座になった人の2人が、口伝の作法に従い、2本の矢を各々3回ずつ射る。昔は矢を、豊作を期待する農作物になぞらえて、的を外れたものは不作と占われたらしい。そのため「弓執りの稽古を必死で行った」という。

神弓祭の日は、新旧の督殿が交替となるため、引き継ぎの儀式である本殿の御鍵渡しが行われる。そしてその夜、八大神社の御分霊を新督殿宅<sup>かむどこ</sup>の神床<sup>うづ</sup>(床の間)に遷す遷御祭が挙行される。夜9時、督殿宅の神床で1年間お祭された八大神社<sup>しんごうじく</sup>の神号軸と神社の神宝<sup>まんだら</sup>である曼荼羅<sup>ざらし</sup>を晒で包み、それを新督殿が両手で高く差し上げながら新督殿宅へ向う。旧の督殿はお祓い<sup>おおぬさ</sup>の大麻を持ち、「おお〜」という警蹕<sup>けいひつ</sup>の声をあげながら先導する。暗闇を行く行列は神遷し<sup>うづ</sup>に相応しい荘厳な気に満ちている。

(川瀬俊之)



射手の作法は一挙手一投足が口伝。神弓祭前に入念な稽古が行われる。



神弓祭の後に行われる御鍵渡しの儀式<sup>じゆん</sup>。準列<sup>れつ</sup>(上座2番)の者が、督殿から神社本殿の扉の鍵を授けられ、新年度の督殿となる。



神弓祭の夜9時過ぎ、遷御祭が始まる。新督殿への引き継ぎでもあることから別名「督殿渡し」とも呼ばれる。

〔実施時期〕 毎年4月第1日曜日

〔実施場所〕 一乗寺八大神社

〔伝承組織〕 八大神社宮座

〔文化財〕 未指定

# 知られざる「御千度」

## 京都市上京区乾隆学区

御千度は、町内で毎年行われる行事のひとつで、春や秋の土・日曜日や祝日に行われることが多い。氏神や産土神である神社で祈祷を行うとともに、社殿の周りを木や竹製の千度串を持ってぐるぐる廻り、町内安全等を祈願する。古くは江戸時代の町文書で見られ、近代でも京都市内では広く実施された。ただ、その源流や、作法等の研究は非常に少なく、地域コミュニティーにおける役割もほとんど論じられてこなかった。今では京都市内でも実施している所も少なくなり、御千度という言葉自体を知らない人も多い。しかし、上京区の人々にとっては、地蔵盆を「お地蔵さん」と親しみを込めて呼ぶように、御千度を「お千度さん」と呼び、なじみ深い年中行事である。

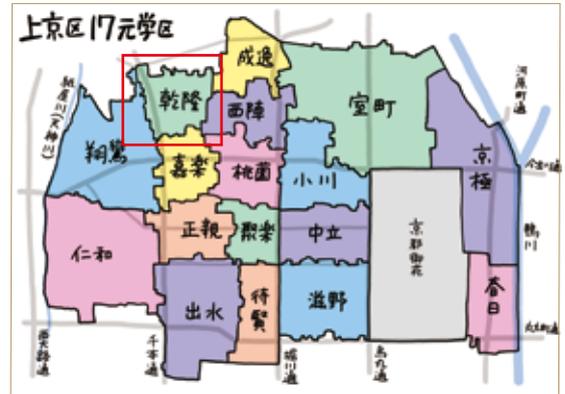
乾隆学区は紫野今宮神社の氏子域にあたり、今宮祭で鉦を奉じる町(4か町)や、若宮大神を遷した御車の巡行を担う町(1か町)もあり、今宮神社との関わりが非常に深い。令和元年度、乾隆自治連合会の協力を得て、地蔵盆の開催日や学区の敬老会の時に、御千度の実施状況について、町内会長や町内の事情に詳しい人に聞き取り調査を行った。その結果、学区内の全26か町中、19か町で御千度が行われていることがわかった。実施時期は、春季が14か町、秋季が7か町、春・秋2回が2か町あった。町内会長と役員だけで代参する町が4か町ほどあったが、住民が集まって行うことが多く、20人以上が10か町、なかには50人以上もの参加がある町もあった。

御千度の行事の特徴である、千度串を持って拝殿の周りを廻る作法は、乾隆学区の各町では現在実施されていない。一方で、今宮神社参道にある茶店や社務所で場所を借りて、御千度のお下がりである御神酒、ジュース、あぶり餅と菓子等を飲食する懇親会は14か町あり、その懇親会にあわせて町内会総会を実施する町が3か町(いずれも春季)あるなど、町によって御千度のあり方や役割は多様である。

(松井朋子)

### 参考文献

- 野地秀俊「京都「御千度」考—寺社参詣とコミュニティー—」『京都市市政史編さん通信』第26号、京都市市政史編さん委員会、2006年



乾隆学区は、おおよそ東は浄福寺通、西は千本通、南は五辻通、北は蘆山寺通に囲まれ、26か町からなる。人口2,988人、世帯数1,480世帯。(平成27年度国勢調査より)



今宮神社には御千度串(長さ約20cm)が100本ほど用意されている。名前や祈願が記されているものもあるが、薄れてしまってほとんど読めない。



今宮神社拜殿の四隅に、直径4cmほどのくぼみがある。御千度で拜殿を廻る際、御千度串で四隅を突く風習があり、長年かけて凹んでいった。

- 〔実施時期〕 春(4月～6月)、秋(11月)
- 〔実施場所〕 紫野今宮神社
- 〔伝承組織〕 乾隆学区内の各町内会
- 〔文化財〕 未指定

上京区乾隆学区における御千度実施状況（令和元年）

No.	★	町	実施時期		参加者数	参加構成		現地までの交通手段	行先ですること				町内に帰つてすること			過去していたこと	備考
			春	秋		会長組長	町内有志		昇殿ご祈禱	町内会総会	茶店で懇親会	社務所で懇親会	御札を配る	お神酒を配る	赤飯を配る		
1	★	A		11月	約7人		○	タクシー等	○					御火焚き饅頭 みかん		御火焚きと合体しているため、護摩木を持っていく	
2	★	B															
3	★	C														11月に今宮神社で御火焚き御札、紅白饅頭、おこし、みかんを配布	
4		D		11月	約20人		○	タクシー等	○	○				持って行ったお菓子をお下がりとして	拜殿を廻った		
5		E															
6		F	4~5月	11月	8人		○ 11月	現地集合	○	○		○	○	○		秋の御千度で運動会	
7		G		11月	約30人		○	タクシー等	○	○			○	○ 参加者		秋の御千緒で運動会 子供も参加	
8		H	3月		約20人		○	現地集合	○	○		○				町内は8組社務所で総会を開きその場でお下がりを分ける	
9		I														町内の神社前で11/3に御火焚き(今宮さんの宮司)	
10	●	J														今宮祭時(5/1御車出し、5/3御位貰い(参拝)、5/19御車納め)にて茶店で休憩しあぶり餅を食べ御札を町内に配る	
11		K	4月		約10人		○	現地集合	○	○	○				皆で町内に帰ってからガレージ等で弁当を食べた	この10年は役員のみだが、それまでは有志参加だった	
12		L	4月	11月	約40人		○ 11月	現地集合	○	○	○				15~20年前迄、皆で弁当食べた 子どもにお菓子を配っていた	子供も参加	
13		M															
14		N	4月		約30人		○	現地集合	○	○				お弁当	社務所で昼から夕方まで懇親会 拜殿を廻る		
15	★	O		11月	約30人		○	タクシー等	○	○					秋の御千度で運動会 お弁当を食べた	町文書に昔の御千度の記録がある ※	
16		P	5月		約30人		○	現地集合	○	○							
17		Q	4月		町内ほぼ全員		○	現地集合	○	○						子供も約10人参加 役員の引継ぎ行事	
18		R	5月		約2人		○	自家用車	○						14~5年前迄、社務所や乾隆会館で仕出し弁当を食べ飲んだ	町内会長+1(有志)が参加	
19		S	4月		約4人		○	現地集合	○						2~3年前まであぶり餅食べてた お神酒と乾きもののお菓子での懇親会があった	町文書に昔の御千度の記録が詳細にある ※	
20		T	4~5月		約20人		○	現地集合	○				○	茶だんご	昔は町に帰ってから懇親会をした		
21		U		11月	2~3人		○	自家用車	○						昔は町内全員でいった赤飯を配った	0157が流行ったとき赤飯の配布を辞めた 配布物は年によってかわる	
22		V	4月		約15人		○	現地集合	○	○						懇親会は1時間30分くらい	
23		W	4月		約12人		○	現地集合	○	○					拜殿を廻った	子供も参加	
24		X	4月		5人			自家用車	○	○					仕出し弁当を食べた	町会長等の引継ぎの役割	
25		Y															
26		Z	5月末~6月初		約50人		○	現地集合	○	○						御千度串を持って拜殿を廻った	子供も参加

御千度を実施しない町

★今宮祭に剣鉾を出す町

●今宮祭で御車の巡幸を担当する町

※ 字数の関係上この表に町文書の内容は反映していない

# 菱妻神社の千種祭

京都市伏見区久我

菱妻神社は、京都市伏見区久我石原町に鎮座する、上久我地区の産土神である。社伝によると、平安時代の後期、永久元年(1113)2月、右大臣源雅実が奈良の春日大社から天児屋根命を勧請し、「火止津目大明神」として祀ったことに始まるとされる。

千種祭は、菱妻神社の氏子祭であり、毎年5月の第1日曜日に神幸祭として「オイデ(御出)」, 第2日曜日に還幸祭として「オカエリ」が行われている。このうちオカエリを「千種祭」と呼ぶが、オイデとオカエリを合わせて千種祭ということもある。また、オイデとオカエリの間、御神霊が御旅所に留まる1週間を「オタビチュウ(御旅中)」という。オカエリの翌日は「ゴエン(後宴)」として、片付けが行われる。

オイデの前日には、「お齋み挿し」が行われる。神社の境内地から榊の小枝を切り出し、神前で祈祷した後、深夜にそれらを神社総代が氏子の家々の門口に挿して回る。この際、榊の小枝を挿して回る神社総代の姿を見てはならず、もし見かけたとしても、決して話しかけてはならないという。門口に挿された榊の枝は、ゴエンの日に取り外される。

オイデの日には、菱妻神社の御神霊を唐櫃に遷して、御旅所まで送る。御旅所は、菱妻神社から南東約600mのところであり、普段は神輿や御所車などが納められている。午前中から御旅所で神輿の飾り付けが行われ、いったん解散した後、午後2時半に菱妻神社に集合する。神社での神事後、行列を組んで唐櫃を御旅所まで送り、御神霊を神輿に遷す(お宮遷し)。

御旅所では、オイデの夜から、御所車を飾る「花巻」作りが行われる。長さ3.5m、幅1cmほどの割竹に糊を塗り、それを回しながら、5色(青・黄・赤・白・紫)の長方形の和紙を巻くように貼り付けていく。和紙には9cmほどの切れ込みが入っており、色とりどりの花を表していることから、花巻と呼ぶという。花巻作りは、御旅中の夜に、18歳から40歳までの男性によ



菱妻神社



お齋み挿しの榊



御旅所の神輿

て構成される協和会によって担われており，例年，200本近くが用意されてきた。

千種祭の当日は，神輿と子供神輿の渡御が行われる。午前中，御旅所で神輿の轅の取り付けや，御所車の組み立てが行われる。昭和30年代まで，御所車には男の子が乗り，お囃子を歌いながら巡行したといわれるが，現在では御旅所前に留め置かれている。午後1時30分頃に子供神輿から順に御旅所を出発し，上久我地区を巡った後，午後4時頃には神社に到着する。神事後，神輿は御旅所に戻り，轅が外されて建物内に収められる。御所車も解体され，花巻は直径50～60cmぐらいの円状に巻かれ，氏子の各家や神輿の舁き手に配られる。配られた花巻は，1年間の家内安全を願い，厄除けとして玄関先に飾られる。

中世以来とも言われる歴史ある千種祭であるが，昭和に入ってからでも，たびたび継承の危機にさらされ，その姿を変えてきた。祭りの中心となる千種祭の神輿渡御についても，戦争による中断から復興しながら，昭和35年(1960)から同38年(1863)，同46年(1971)から同52年(1977)という2度の中断を経験している。それでも，昭和53年(1978)の御旅所新築を契機に再開し，御所車も御旅所に飾られるようになったという。また，かつてのお囃子を復活させようと，平成22年(2010)に久我千種囃子保存会によって千種祭お囃子教室が開催され，翌年には約50年ぶりにお囃子の奉納が行われている。この教室は，文化庁の伝統文化親子教室事業も活用しながら現在まで続けられている。このような地域の人々の不断の努力により，少しずつその姿を変えながらも，祭りが維持されてきているのである。

(今中崇文)



花巻作り



御所車



玄関先に飾られた花巻

〔実施時期〕 5月第1日曜日～第2日曜日

〔実施場所〕 菱妻神社，上久我地区内

〔伝承組織〕 上久我地区

〔文化財〕 未指定

# 宝泉寺のお経くり・虫送り

京都市右京区京北下熊田町

宝泉寺は京北の下熊田町にある真言宗御室派の寺院である。現在の檀家数は集落内の約40軒である。宝泉寺では、7月の土用の丑の日に近い土曜日もしくは日曜日にお経くりと虫送りが行われる。お経くりとは大般若経転読を指す。

大般若経転読といえ、折本を用い経典を傾けながら本文の紙をばらばらと一方へ落とすようにし、その際に経題だけを大声で読み上げるのが一般的によく見られる手法であるが、宝泉寺の大般若経転読は卷子本の大般若経を用い、さらに巻末まで広げられるのが特徴である。

当日は、朝、宝泉寺の住職らが大般若経や仏具などを本堂内に出し、虫干しと、仏具の掃除をおこなう。14時頃から集落の檀家の人々が本堂内に集まりはじめ、15時に住職らが本堂内で般若心経などの読経を行う。その後、大般若経の転読に入り、住職らが10巻の卷子本の大般若経を取り、経題を大声で読み上げてから、最初から最後まで広げる。そして、最後まで広げたものを檀家の人々が順に巻きなおす作業をおこなう。そのため、この行事は集落の人々がいなければ成立しない行事といえるだろう。10巻の卷子本の大般若経の転読と巻きなおす作業が終われば、折本の巻第578「大般若理趣分経」を転読し、檀家の人々がお加持を受ける。続いて、法要の際に本尊として掛けられていた十六善神の軸を箱に収め、その箱を掲げてお加持を受ける。

本堂内で大般若経転読の際に祈祷した、祈祷札を当日取ってきた竹にくくり、下熊田の集落の村境である、アケシグチ(明石口)、クマタグチ(熊田口)、ウタキグチ(卯滝口)の3か所に立て、般若心経を唱える虫送りの行事を行い、一連の行事が終了する。

(山本拓人)



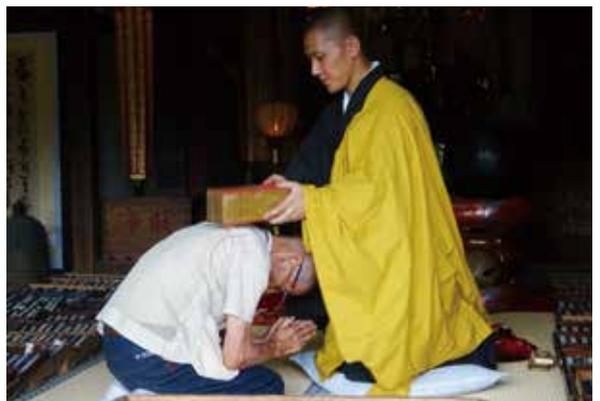
明石口での虫送り



お経くり



檀家の人たちが手分けして巻き直す



折本の理趣分経によるお加持

〔実施時期〕 7月土用の丑の日に近い土曜日  
または日曜日

〔実施場所〕 金花山宝泉寺、村境

〔伝承組織〕 宝泉寺及びその檀家

〔文化財〕 未指定

# 久我神社のお百灯

京都市伏見区久我

久我神社は、京都市伏見区久我森ノ宮町に鎮座する、下久我地区の産土神である。旧下久我村の北外れに位置する当社は、延喜式神名帳の「久何神社」とみられ、江戸時代には森大明神とも呼ばれていた。

久我神社のお百灯は、五穀豊穰・家内安全を祈る行事とされ、毎年8月28日に営まれてきた。しかしながら、参列者の減少にともない、より参加しやすいようにと、令和元年から28日に近い日曜日へと変更された。例年、神事は午後2時から営まれるが、都合により、令和元年は午後3時から開始であった。

本殿と割拝殿の間には、ロウソクを並べた棚を2つ、向かい合うように並べる。神事に先立ち、集まった氏子総代(3名)と町総代(6名)の代表によってロウソクに火が灯される。ロウソクの火は、神事が終わるまでそのままにされる。神事が終わってひと段落すると片付けとなり、ロウソクの棚も掃除され、割拝殿壁際の元の位置に戻される。昭和初期までは、ロウソクではなく、村内で採れた菜種油を燃料とする灯火であったという。

神事の際には、各氏子総代から納められた米、するめや昆布などの海産物、野菜、果物といった供物とともに、4枚のお札を載せた三方が神前に献ぜられ、お祓いを受ける。これらのお札は、氏子総代が依頼して、地区内にある福生寺と妙真寺という2つの日蓮宗寺院にそれぞれ隔年ずつつくってもらっている(令和元年は福生寺)。「ナヌカボン」(七日盆)の日に依頼すると、「オボンノオツトメ」(十六日盆)での読経にあわせて祈祷してもらい、後日(例年8月20日ごろ)受け取りに向かう。

お祓いを受けたお札は氏子総代に渡され、数日のうちに、東西南北の村境に立てられる。神社の境内から切り出された長さ3mほどの竹の先に切り込みを入れ、お札をはさみ、昨年のもをを外してから、電柱や柵などにくくりつられる。取り外した古いお札と竹は、正月まで氏子総代の家で保管され、久我神社の境内で行われるトンドで焼かれる。

(今中崇文)



祭礼当日の久我神社



ロウソクに火を灯す



北 南 西 東

村境に立てられるお札



竹の先に  
お札を挟む

- 〔実施時期〕 8月28日に近い日曜日
- 〔実施場所〕 久我神社
- 〔伝承組織〕 下久我地区
- 〔文化財〕 未指定

# ひろがわらの観音堂での盆行事

## 京都市左京区広河原

広河原は、桂川(大堰川)の源流である佐々里峠以南の山村で、尾花町、菅原町、下之町、能見町、杓子屋町の5地区からなる。佐々峠を北に越えると南丹市美山に、能見峠を東に越えると左京区久多に至る。大堰川に沿って南下すると花脊に入り、そこから花脊峠を南へ越えれば鞍馬に至る。広河原は丹波国に位置し、明治22年(1889)には芹生村・下黒田村・宮村・上黒田村・灰屋村・片波村とともに黒田村に属した。昭和30年(1955)、周辺1町5村が合併し京北町となったが、広河原は2年後の昭和32年(1957)4月1日に分離し、京都市に編入した(昭和の大合併)。

広河原では、8月7日に墓参りがあり(七日盆)、14日を中心に各家でお盆の行事が行われる。15日には菅原町の東禅寺(臨済宗天龍寺派)で施餓鬼が行われる。また、この15日には、観音講の人たちが佐々里峠の祠から地蔵(石仏)を下之町の観音堂に迎える。観音講は、毎月17日の観音縁日に東禅寺に集まって御詠歌をあげているほか、8月は15日と24日に、観音堂で御詠歌をあげる。

8月15日は、午後6時頃から観音講の人たちが観音堂に集まり、御詠歌をあげる。御詠歌は大正時代以降、全国的にいくつかの流派に再編された。広河原では東寺流の御詠歌をあげるが、曲によっては「半海節」で歌われる。これは、どこの流派にも属さない地域独自の節回し(旧節)であり、貴重なものである。観音講が終わっていったん解散した後、午後8時頃になると、観音堂で盆踊りが行われる。曲目は、24日と同じで、若い僧侶に恋心を抱いた女性の心境が語られる口説き形式の「ヤッサ」、即興的な要素が強く音頭を取る人が次々と変わる「ヤッサコサイ」、同様に即興的かつ掛け合いの要素が強い「コレアネサン」の3曲で、最後にはお楽しみ抽選会などがあって盛り上がる。なお、平成22年(2010)までは、これら15日に行われる観音堂での行事は、17日に行われていた。



観音堂に安置された佐々里峠の地蔵



観音講の御詠歌



8月15日の盆踊り。普段着で参加する人も多い。観光客はほとんどいない。

8月24日は、朝8時頃からマツバ(松場)で松上げの準備が行われる。ただし、トロギと呼ばれる柱松<sup>はしらまつ</sup>の準備、すなわち添え木の伐採や皮むきは5月か6月頃から始まっており、マツバに立てる1000本を超えるジマツ(地松)の準備も、7月にはすでに始まっている。この日も、午後6時頃から観音講の人たちが観音堂に集まり、ご詠歌をあげる。午後7時頃になると、男衆が自宅の床の間の神号軸<sup>しんごうじく</sup>を拜み、門先に門火<sup>かどさき</sup>を灯して、マツバに向かう。マツバに集合すると手分けしてジマツを灯し、午後8時頃になると、鉦と太鼓を打ち鳴らすなかで、放り上げ松をトロギの上部のカサをめがけて投げ上げて点火を競う。カサに点火し、火柱があがると、トロギは倒され、歓声が上がる。倒したあと、火に長い棒を差し込んで搔き上げるツッコミが行われるのが広河原の松上げの特徴である。

松上げを終えた男衆が、太鼓を担いで伊勢音頭をうたいながら観音堂へ練りこむと、それまで女性が踊っていたヤッサと混じり、やがて男女がいっしょになった踊りの輪ができる。頃合いを見計らって、誰かが「ホーサユーホーオ」とうたいだすと、ヤッサコサイの踊りが始まる。さらに、コレアネサンが踊られる頃にはときおり笑い声も混じり、盆踊りの興奮は最高潮になる。

翌25日、松上げの片づけが行われる。石地藏も、佐々里峠に返される。

広河原の盆踊りは、板敷きのお堂の中で下駄を踏み鳴らして踊ることや、即興のかつ掛け合いの歌で踊られることなど特徴がある。また、広河原では昭和40年代までは、15～17日(盂蘭盆<sup>うらぼん</sup>)、24～26日(地藏盆<sup>じぞうぼん</sup>)の6日間、つまり本盆<sup>ほんぼん</sup>と裏盆<sup>うらぼん</sup>の2つの盆行事として盆踊りがあった。現在の15日と24日の2回の盆踊りは、その形態を伝えるものであり貴重である。

(福持昌之)



松上げ。京都バスの臨時便(予約制)もあり、多くの観光客が訪れる。



女性だけで踊る「ヤッサ」



男女が混じり、掛け合い形式の「ヤッサコサイ」

〔文化財〕京都市登録無形民俗文化財「広河原松上げ」(昭和58年6月1日登録)

京都市登録無形民俗文化財「広河原ヤッサコサイ」(昭和62年5月1日登録)

# 即成院二十五菩薩お練り供養法会

東山区泉涌寺山内町

この行事は、泉涌寺の総門脇に建つ即成院(真言宗泉涌寺派、京都市東山区)で、毎年10月第3日曜日に行われる。本堂から地蔵堂まで約60mの掛け橋が作られ、二十五菩薩が来迎し、極楽浄土へ導く様子を表すもので、「迎講」「来迎会」とも呼ばれる行事である。

午後になると、まず、修験衆の法螺貝とともに、稚児が橋を渡って供物を地蔵堂へ運ぶ。その帰りは稚児が花を本堂へ運ぶ。2回目の行列は、楽人による雅楽の演奏と共に、稚児らが散華をしながら地蔵堂へ渡る。その帰りは、稚児が百味(供物)を本堂へ運ぶ。3回目の行列は、雅楽とともに過去帳が納められた宝塔を載せた輿が運ばれる。その後ろを、地蔵菩薩、観音菩薩、勢至菩薩、普賢菩薩の順に、二十五菩薩が橋を渡る。地蔵堂に到着すると、輿から宝塔を取り出し、観世音菩薩が持つ台座に載せ、呑海講による御詠歌とともに、本堂に戻ってくる。本堂では、呑海講による来迎和讃に合わせて、観世菩薩と勢至菩薩による「極楽浄土の舞」がおこなわれ、最後に宝塔が本尊阿弥陀如来のもとへ迎えられる。

即成院は、明治5年(1872)まで、大亀谷(現在の伏見区深草大亀谷東寺町)にあり、廃仏毀釈のために廃寺となり、明治35年(1902)に現在地に復興した。この行事がいつから即成院で行われていたかは、史料が残っておらず詳らかではないが、現在の形がつくられたのは大正3年(1914)のことで、茂山[二世]千作が依頼を受けて、奈良の當麻寺の練供養を調査し、なるべくその通りに写したという。ただ、當麻寺では住職が朗誦する「来迎和讃」を、即成院では呑海講が担っている点は、特筆すべき点である。

呑海講とは、伏見の住人によって組織された御詠歌講で、明治時代の復興の際、市中勧募をして復興費用を集めたと伝えられている。また、呑海講が伝える呑海節は、大正時代以降の全国的な御詠歌再編のなかで、どの流派にも属さなかった、いわゆる旧節のひとつである。おそらく、枚方宿の鍵屋の当主であった吉川呑海(1805頃～1869)が広めた節回しと考えられる。即成院と呑海講の関わりは、大亀谷時代にさかのぼると考えられ、このお練り供養は江戸時代における即成院への信仰のありかたをうかがわせる伝統行事であるといえる。

(福持昌之)



呑海講の行道



観音菩薩・勢至菩薩の行道



宝塔を載せた輿



極楽浄土の舞(極楽の舞)

- 〔実施時期〕 毎年10月第3日曜日
- 〔実施場所〕 光明寺即成院
- 〔伝承組織〕 菩薩会、呑海講ほか
- 〔文化財〕 未指定

# 北野天満宮瑞饋祭

## 西之京地域（京都市上京区・中京区）

この行事は、平安時代に西之京神人が五穀豊穰を感謝し、新穀野菜に草花などを飾り付け、菅原道真公の神前に供えたのが始まりとされている。慶長12年(1607)に西之京神人と周辺農家が協力して葱花輦型の神輿型を形成し、その後享和2年(1802)、今の形式である唐破風の四方千木型となった。現在は、その継承を西ノ京瑞饋神輿保存会が行なっている。

祭の1か月前より千日紅の収穫や夜なべ作業など様々な準備が行なわれる。9月30日にはズイキの収穫が行なわれ、10月1日の午前に飾り付けが完成となる。瑞饋神輿は、それと同様の工程で作られた瑞饋神輿よりも小ぶりの子ども神輿とともに御旅所に飾られ、10月4日の午後、西之京各町内を賑やかに巡行する。そして、翌日5日には解体され、なまものの飾りは畑に置かれ、やがて土に還る。

この神輿の特徴は、何といてもその装飾に用いられる色鮮やかな野菜・穀類・草花である。屋根には赤の「唐の芋」と緑の「真芋」2種類のズイキを使い、それらの根元(軒先)を丁寧<sup>まじめ</sup>に切り揃えて葺く。千木や柱にみられる麦藁細工の文様は友禪の型彫り師によるもので、獅子頭は唐の芋の頭芋を逆さにし、彫刻を施す。瓔珞には赤ナスや五色トウガラシが用いられ、真紅は千日紅の花を糸を通して装飾する。また、稲藁の梅鉢紋には夏みかんと稲穂を付ける。そして、欄間、桂馬、腰板と呼ばれる「細工もの」は保存会の会員が毎年趣向を凝らしており、様々な植物を使って昔話のモチーフやその年に流行したものなどを作っている。特に欄間および桂馬は、以前は和物で統一されていたが、近年は洋風のおとぎ話や映画のモチーフなども取り入れられるようになった。

神輿を彩るこれら穀類・野菜類は、農家が減り、田畑は少なくなりつつも、現在も西之京の農家によって栽培されている。さらに、農家と商家が混在していた地域であればこそ、職人の技術が反映されている点もまた大きな特徴である。

(真柄 侑)

〔実施時期〕 毎年10月1日～10月5日

〔実施場所〕 北野天満宮御旅所、西之京各町内

〔伝承組織〕 西ノ京瑞饋神輿保存会

〔文化財〕 京都市登録無形民俗文化財「西ノ京瑞饋神輿」(昭和58年6月1日登録)



会所にて飾りもの準備



子ども神輿の欄間細工「アラジン」



ズイキ刈り



瑞饋神輿の巡行



上七軒の賑わい

# つち や ちよう お ひ たき さい 槌屋町の祇園御火焚祭

京都市下京区猪熊通高辻上る槌屋町

京都市下京区の猪熊通高辻上る槌屋町は、かつては染関係の町だった。ここでは地域の伝統行事として、8月の地藏盆と11月の御火焚祭(祇園御火焚祭)が行われている。御火焚祭とは、京都を中心に各地で行われている冬の火祭りであり、神社の行事として行われるほか、地域の行事として民家や商店でも行われることもある。

槌屋町では、毎年11月2日に町の倉庫から道具類を當家(当番の家)に持ち寄り、午後1時頃から小さな神輿(高さ約112cm、轆の長さ191.3cm)を飾り、祭壇を組み、供物を供える。そして、牛頭天王の神号軸を御神体として神輿に遷す。

翌3日は、天道神社(猪熊通仏光寺西入)の例大祭があり、祭典には町内の人々も参列する。そして、午後からの剣鉾や神輿の巡行列が槌屋町の當家を通り過ぎるのを家の前で見送った後、町内の人々は當家の家集まる。

當家の家では、割木を井桁に組んで火を焚き、その火でみかんを焙って皆で食べる。これを食べると風邪をひかないと言われている。そして、供物をおさがりとして町の家数でわけ、欠席の家には、手分けして近くの人が配る。それと並行して、片づけを始め、神号軸は町内の有志が一年間預かり、神輿やその他の道具は倉庫へ片づける。

いつ槌屋町の御火焚祭が始まったのか詳らかではないが、槌屋町には毎年の御火焚祭の當家や供物の一覧などを書き継いだ帳面があり、それによると文化5年(1808)11月5日には既に行われていたことがわかる。また、その帳面に「みかん」「満んぢう(饅頭)」「おこし」などの記載があり、今も御火焚祭に欠かせないこれらの供物が、19世紀初頭から続いていることがわかる。

また、六角形の神輿の各面に取り付けられた鏡には、いずれも「文化九壬申十一月／祇園牛頭天王」と銘があり、その年(1812年)に神輿が作られたと考えられる。その後、帳面から大正3年(1914)と昭和57年(1982)に神輿の修繕をしていることがわかる。御火焚祭は、アジア太平洋戦争の最中でも行われていたが、終戦直後の昭和20年(1945)だけは休止している。



天道神社の巡行列を迎える



みかんを焼く



# 民俗文化財としての「京都五山送り火」



毎年8月16日の晩、京都盆地の東・北・西の山々に、送り火が灯されます。京都の夏の風物詩として有名な五山の送り火です。午後8時、東山の如意ヶ嶽の山腹に「大」が灯り、その後5分おきに松ヶ崎の西山に「妙」東山に「法」、そして西賀茂の船山に帆掛け船、大北山の大字山に左の「大」、嵯峨鳥居本の曼荼羅山に鳥居形が点火されます。

これらは総称して京都五山送り火と呼ばれていますが、それぞれ「大字送り火」「松ヶ崎妙法送り火」「船形万燈籠送り火」「左大字送り火」「鳥居形松明送り火」として、京都市登録無形民俗文化財に登録されています。それぞれが、山の麓の地域で護持されてきた、地域の伝統行事です。

送り火は、お盆すなわち盂蘭盆の行事の一環として行われてきました。俗に「地獄の釜の蓋があく」とも言われるように、ご先祖様すなわち祖霊があこの世から現世(この世)に帰ってくる期間とされており、迎え火や送り火は、祖霊の目印のために焚かれるとされています。この時、祖霊だけでなく、無縁仏など招かざる客もやってきますが、それらも供養をする必要があることから、お寺で施餓鬼会が行われ、「三界萬霊」を供養します。

ところで、盂蘭盆の由来は、「盂蘭盆経」に示されていると考えられがちです。しかしながらその内容は、釈迦の十大弟子の一人である目連尊者が、死後に餓

鬼道に堕ちた母を救うために供養を行なったという話で、施餓鬼供養の功德が説かれています。これがお盆の施餓鬼会の由来とされていますが、そこには祖霊が帰ってくるという思想は説かれていません。したがって、仏教の宗派によっては、「祖霊がお盆に帰ってくるというのは迷信」と説明しています。

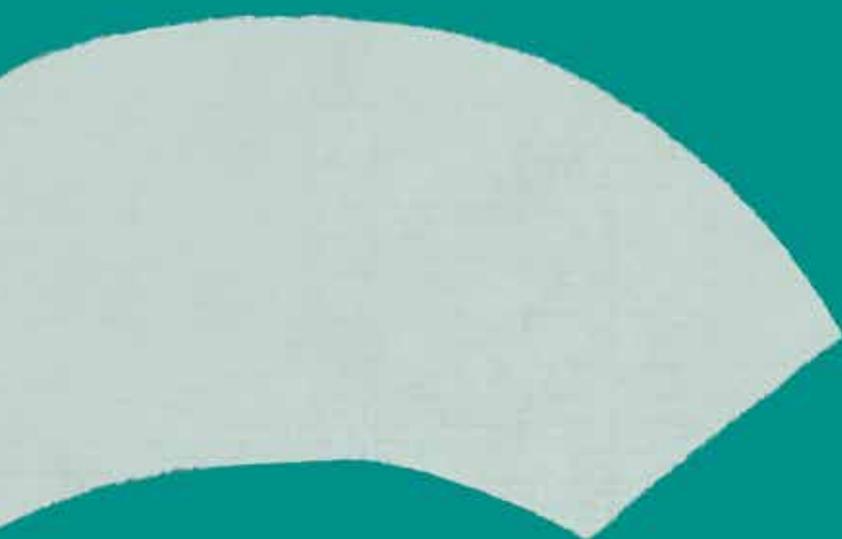
民俗学の説明では、もともと日本には正月に年神と呼ばれる祖霊を迎え、半年後の7月(旧暦の盆月)にも祖霊を迎える風習があったといえます。また、道教の思想には、中元(旧暦7月15日)は地獄を司る地官大帝の誕生日で、死者の罪が許されるという考え方があり、その影響を受けている可能性もあります。

つまり、盆行事は仏教由来の行事ではなく、もともと世間に広まっていた祖霊に対する風習(民俗行事)があって、そこに仏教が影響して、現在のような「仏教的な民俗行事」になったのです。

このような仏教とお盆の関係は、キリスト教とハロウィンの関係に少し似ています。もともとケルト人の大晦日である10月31日の晩は、あの世とこの世を隔てる門が開いて、祖霊が家族を訪ねるとともに悪い精霊などもやってくとされていました。主にスコットランドに伝わっていた風習で、キリスト教の行事ではなかったのですが、今ではキリスト教の社会(特に北米など)では欠かせない年中行事となっています。(福持昌之)

文化財名称	保存団体	伝承地域	字・形	山の名
大字送り火	特定非営利活動法人大文字保存会	左京区銀閣寺町周辺(旧浄土寺村)	大	如意ヶ嶽・大字山
松ヶ崎妙法送り火	公益財団法人松ヶ崎立正会	左京区松ヶ崎西町(旧松ヶ崎村)	妙	西山・万燈籠山
		左京区松ヶ崎東町(旧松ヶ崎村)	法	東山・大黒天山
船形万燈籠送り火	船形万燈籠保存会	北区西賀茂(旧西賀茂村の一部)	船形	船山
左大字送り火	左大字保存会	北区衣笠街道町周辺(旧大北山村)	大	大字山
鳥居形松明送り火	鳥居形松明保存会	右京区嵯峨鳥居本町(旧仙翁寺村)	鳥居形	曼荼羅山

## 2 府下の祭り行事



# 囲垣祭

南丹市美山町佐々里

囲垣祭は、毎年4月29日に南丹市美山町佐々里の八幡神社で行われる。佐々里に生まれた男子が15歳になり、栗材の板木に自分の名前を書いて氏神である八幡神社を囲む垣根に納めることで、一人前として認められたことを祝う行事である。この行事は、かつて佐々里が弓削から分村した際、土地の境界をめぐって争ったことに由来する。山林の中の境界について弓削との仲裁が整ったことをきっかけに、板木を垣根状に囲うこの行事がはじまったといわれている。

現在、神社の境内を清掃するかたわら、手分けして板木を垣根(現在は金属製の囲い)から引き抜き、作業場まで運び電気鉋で表面を削る。再び神社に運ぶと、各自名前を書き、再度垣根に戻す。戻す際は向かって左から年長者順に並べる。なお、仕事等の関係で当日参加できないものは、父親が替わって名前を書いて納める。

かつては早朝から集まって神社境内の清掃と垣根をやぶる作業を行った。昔は100枚を超える枚数の板木が神社の境内を囲うように建てられていたようで、その方法は栗材を柱にしてネソで結束していた。ネソとはクロモミジなどの雑木を火であぶって練ったもので、かつては筏流しの際木材を結束するとき用いるなど、丈夫な紐として重宝した。この年初めて板木を寄進する15歳になった男子は、板木にするための木を山から切り出すところからはじめる。当日早朝山に入って木を切り出すと、夕方までに村の年配者に手伝ってもらいながら板状に加工して垣根に納めたという。なお、この行事に使用するために切り出す材は、村人の誰の山からでもよかったという。

この行事は、佐々里がかつて他村からの独立を果たした村の開発伝承を背景とした由来を持つとともに、村の正式な構成員として15歳の男子が村で生きていくための山仕事のいろはを学ぶ節目の行事として重要な意味があったと考えられる。時代が変わり、山仕事をする村人は少なくなったものの、行事は引き続き行われておりたいへん貴重である。(向田明弘)

参考文献 ■ 美山町誌編さん委員会編  
『美山町誌 上巻』美山町、平成12年



八幡神社境内の清掃



木札を書く様子



名前を書いた木札を垣根に建てる様子



完成した垣根

〔実施時期〕 毎年4月29日  
(かつては4月27日)

〔実施場所〕 八幡神社

〔伝承組織〕 佐々里区民

〔文化財〕 未指定

# 宝積寺の鬼くすべ

乙訓郡大山崎町字大山崎

「鬼くすべ」とは、毎年4月18日、宝積寺(真言宗智山派)で行われる「大厄除追儺式」のことである。追儺とは、悪鬼を払い、悪霊を退け、疫病を払う儀礼である。宝積寺の住職が導師となり、扉を締め切った本堂で護摩を行った後、追儺が行われる。導師をはじめとする諸役、訪れた参拝客たちが、檜葉を燻べた煙の充満する堂内で式を見守る。この様子から「鬼くすべ」と呼ばれている。

当日、堂内には護摩壇が設けられ、内陣の鴨居にはたくさんの餅が吊り下げられている。この餅は、円形で牛王宝印を捺した札が添えられ、2本の割竹では挟まれている。悪鬼の姿を映す「鏡の餅」であるという。追儺式は導師、勅使(正副)、老僧、鬼(赤鬼・青鬼・黄鬼)、七福神(毘沙門天・大黒天・弁財天・寿老人・福祿寿人・布袋尊者・恵比須神)、職衆(僧侶・会奉行等)・侍者・先達(修験者)、福男、お器等、30名程で執り行われる。一同は行列となり山門から本堂へ入る。導師が堂内に结界を張り巡らせ、護摩が行われた後、鬼が登場し追儺が行われる。導師が、福男から蓬の矢、桃の弓を受け取り、鬼に向かって3度矢を射る。鬼は須弥壇を右に3度回って本堂を出て山門へ逃げていく。導師は福男と七福神を率いて追う。鬼は山門の外へ逃げ、数人の福男が追って鬼の出た後の山門を閉める。これで追儺は終了する。導師・福男・七福神は、本堂の正面回廊へ出て参拝客に向かって福餅撒きを行い、「鬼くすべ」は終了する。

「鬼くすべ」は、牛王宝印札の存在や祭文が読み上げられることから、修正会や修二会との共通点があり、天下泰平・五穀豊穰を祈願する年初の法会であると考えられる。一方で、七福神や修験者など他の修正会や修二会ではみられない「鬼くすべ」独自の要素も確認できる。

(宮澤早紀)

〔実施時期〕 毎年4月18日

〔実施場所〕 天王山(銭原山)宝積寺

〔伝承組織〕 宝積寺および大山崎町の住民

〔文化財〕 未指定



山門から本堂へ移動する様子。前方が法螺貝を吹く修験者、後方が松明を手にした鬼。



追儺式が行われる堂内の様子。手前が護摩壇で導師が着座している。奥の鴨居に鏡の餅が吊り下げられている。



追儺で鬼が追い出される様子。堂内には煙が充満している。

# オシマ参り<sup>まい</sup>

舞鶴市冠島<sup>かんむりじま</sup>

オシマ参り(雄嶋参り)は、毎年6月1日に若狭湾に浮かぶ冠島(雄嶋／老人嶋ともいう)に祀られている老人嶋神社へ豊漁と海上安全祈願のために参拝する行事である。参拝の習俗は丹後から若狭湾沿岸にかけて広く見られるが、その中心となるのは冠島の対岸に位置する舞鶴市三浜、小橋、野原の3地区で、毎年交替で当番を務める。令和元年は野原区が務め、同2年は小橋区、同3年は三浜区の予定である。

当日午前9時半頃、各地区の漁港から大漁旗を立てた漁船20隻あまりが参拝客を乗せて次々と出港し、冠島に向かう。当番区の野原漁港からは笛や太鼓で賑やかに囃しながら出港した船を先頭に、来賓などを乗せた漁船数隻が約45分かけて冠島に到着すると、参拝客らは「奉納老人嶋大明神」と書かれた赤い幟<sup>のぼり</sup>を持って、岩だらけの海岸を神社に向かう。老人嶋神社では、参拝客らが持ち寄った赤い幟を神社の本殿脇に立てて整列すると、神職による祝詞<sup>のりと</sup>の後、各地区や団体の代表らが参拝、その後順次参列者が参拝する。その後、神社脇に弁財船の模型を祀る船玉神社に参る。平成30年(2018)の台風の影響で建物などに被害が出たため、現在、再建に向けて関係者が努力を重ねている。なお、参拝を終えると、岩場の海岸で地区ごとに会食し、その後それぞれ漁船で戻っていった。このような老人嶋神社への参拝は、宮津市、伊根町の他、福井県小浜市や高浜町など、周辺地域から現在も行われており、広域の信仰圏を有する。

冠島周辺は、古来より好漁場として、また海上交通の要所として知られ、特に冠島は海難からの避難島として利用されるなど、丹後や若狭の海に生きる人々にとって「雄島さん」と称して篤い信仰を集めてきた。また、大正13年(1924)に「オオミズナギドリ繁殖地」として島全体が国の天然記念物に指定されるなど、丹後を代表する貴重な文化遺産である。(向田明弘)

参考文献 ■ 京都府立丹後郷土資料館編『丹後の漁撈習俗』  
京都府教育委員会、平成9年



冠島へ向かう参拝者



赤い幟を建てる様子



老人嶋神社を参拝する様子

〔実施時期〕 毎年6月1日  
〔実施場所〕 老人嶋神社(冠島)  
〔伝承組織〕 三浜区、小橋区、野原区  
〔文化財〕 未指定

# 佐古の野神神事

## 久世郡久御山町佐古

灯りを消した暗闇の中で音を立てず声も出してはいけない神事。暗闇の奇祭と呼ばれる。佐古の人々は野神を祀り無病息災、一年の平穏無事を祈る。久御山町の野神は佐古・林・野村にあったが、現在は佐古の野神の神事のみが残る。戦前は府立久御山高等学校の東側に祀られていたが、現在は若宮八幡宮の西側の境内地に移されている。

6月4日朝、先ず真菰まこもで大きな粽ちまきを3本作る。次に木製の箱に真菰を敷き、餅を並べ、その上に真菰を被せる。以前は氏子の数だけ粽を作っていたが、現在は138軒に増え、138本のチマキを作るのは材料集めも労力も間に合わないので平成14年から現在の形に変えた。神饌しんせんは洗い米、赤味噌、塩、ヘクソヅル。淡竹はちく たけのこの筍3本と桑の木の箸、粽、そして葉を少し残した淡竹の棹しんせん(約2m)の先にカマスの干物を縄で吊るしたものである。

神事は5日午前零時に始まる。公民館など野神境内周辺の明かりは消され、神事を一般住民が見ることは許されない。神事行列は神職(森宮東の玉田神社宮司が兼務)を先頭に、宮総代みやもり、宮守、自治会役員、農家組合役員が公民館から野神境内まで進む。全員が石塔前に整列すると、粽を持った人が前に進み、神事が終わるまで捧げている。神事は闇の中で行われ、音を立てず、声を出してもならないので、宮司による祝詞のりとも口を動かすだけである。拍手も両手が合うところで止め、決して音を立ててはならない。

神事終了後、粽の中の餅を佐古全戸の数に切り、夜明け前に各戸の郵便受けに置いて回る。この時も声を出してはならず、人に出会っても挨拶を交わすことはできない。  
(樽井由紀)

〔実施時期〕 6月4日～5日

〔実施場所〕 野神境内(久御山町佐古小字内屋敷)

〔伝承組織〕 佐古住民

〔文化財〕 未指定



三方さんほうに盛った神饌

三方に竹筒を4本立て、ヘクソヅル以外は枇杷の葉を敷きカワラケを載せる。筍は紅白の水引で束ねる。桑の箸を添える。



野神

戦前、巨椋池周辺に流行したマラリアにならないようにと野神さんを祀った。



神事行列

臭い匂いのヘクソヅルを供えるのは虫除け、干しカマスを吊るすのは野犬・野猫対策とされる。

# 口司の虫送り

## 南丹市園部町口司

毎年7月中旬(かつては7月18日)の夕方から宵の口にかけて、南丹市園部町口司(上口司, 下口司)で行われる。山中に祀られる口司区の氏神鏡神社からもらい受けた火を、各自持ち寄った松明に移して水田の畦道をくまなく歩き、1か所に集めて燃やすいわゆる農作物の害虫駆除と豊作を祈願して行われる行事である。

夕方、区長を中心に村人が参列して鏡神社で神事を行った後、神火を移した提灯を持った区長を先頭に集落まで戻ると、上口司では集荷場前で用意しておいた柴に提灯から移し、おのおの持参した松明に点火する。子どもたちが太鼓を打ち鳴らす中、各自所有する水田の畦道を燃えさかる松明を抱えながら歩く。かつては、畦道を歩いた後、松明は半田川の川縁に集めて燃やした。一方、下口司では、代表者が同じく神火を持参した提灯にうつして集落まで運び、上口司での松明点火を待って、提灯の火を準備しておいた柴にうつす。その後、各自持参した松明に火をつけ、同様に所有する水田の畦道や川縁を歩き、松明は半田川の河原でそれぞれ燃やして終了となる。かつては、半田川の上流となる口司で虫送りが行われると、順番に下流の集落が行ったというが、現在は口司のみで行われている。

このような農作物に害をもたらず虫たちを松明の火に集めて集落の外へ送り流すといった虫送りの行事はかつて全国各地で見られ、京都府内でも京都市左京区久多や木津川市鹿背山、同市山城町椿井などで現在も行われている。しかし、近年農薬等の使用で害虫による脅威が軽減されたこと、あるいは農業そのものの担い手が減少していることなどさまざまな農業を取り巻く環境の変化によって行われなくなりつつある行事のひとつである。

(向田明弘)

〔実施時期〕 毎年7月中旬(かつては7月18日)

〔実施場所〕 鏡神社, 口司区内

〔伝承組織〕 口司区民

〔文化財〕 未指定



鏡神社



神火の提灯を持つ区長



松明を持って畦道や川縁を歩く

# 城屋の揚松明

## 舞鶴市字城屋



神社境内に立つ大松明

この行事は、アゲタイマツ(揚松明)と呼ばれ、毎年8月14日夜、舞鶴市の城屋区内に祀られる雨引神社の祭礼として行われる。バンバとよばれる境内広場の中央に柱状の大松明を立て、その先端にとりつけたハチと称する逆円錐形のオガラおおたいまつの東に競争で小松明を投げ上げて着火し、盛大に燃え上がらせるいわゆる柱松形式の火祭である。

小松明を投げ上げるなど揚松明の中心になるのは青年会のメンバーであるが、大松明の製作はじめ準備その他は区民のほとんどが関わるなど、地域総がかりで行っている。点火を任せられる青年会のメンバーは、高野川でギョウ(行)と称する禊みそぎを済ませてから取りかかる決まりとなっており、本殿に参拝した後、小宮の前で点火した小松明を手にバンバに入場し、大松明を取り囲んだ後、青年会長の合図で燃えさかるまで投げ上げる。焼け落ちた御幣ごへいを会長が拾って神前に供えると、暫くして大松明が倒され消火作業を行い終了となる。

このような柱松形式の火祭は京都

府の洛北地域から丹波丹後方面にかけて数か所で行われており、盆行事や愛宕あたご信仰との関連が伺われる。この行事はいずれの関連も伺えないが、高野川流域の豊作祈願と雨乞い信仰や大蛇伝承しゅうごうが習合した氏神の祭礼行事である。(向田明弘)



点火の様子

- 〔実施時期〕 毎年8月14日
- 〔実施場所〕 雨引神社ほか
- 〔伝承組織〕 城屋区役員、社寺総代、城屋青年会及び城屋区民
- 〔文化財〕 京都府登録無形民俗文化財(昭和62年4月15日登録)  
舞鶴市指定無形民俗文化財(昭和40年5月31日指定)



参道の橋に置かれた藁蛇

# 石清水祭

## 八幡市

石清水祭は八幡市にある石清水八幡宮の祭礼で、賀茂祭(葵祭)、春日祭とともに三勅祭として知られている。毎年9月14日夕刻から15日深夜まで丸一日かけて行われる。祭神の乗った3基の御鳳輦が山上の本殿と山下の頓宮殿をおよそ500人の神人と呼ばれるお供の人々とともに往復する様は大規模かつ壮麗で、ある神職は「他の勅祭社は20年に一度のご遷宮だが、うちは毎年ご遷宮しているようなもの。」と言い表している。

祭礼は9月14日の夕刻に三柱の祭神は普段鎮まっている山上の本殿の内殿から外殿へ遷る「外殿渡御祭」から始まる。翌15日の午前2時、神幸祭が挙行される。3基の御鳳輦が順に外殿に寄せられ祭神が中に遷る。2時20分頃に神人達が本殿前に召し立てられ、3時15分山下の頓宮へ向けご鳳輦が出立する。一方、山下の頓宮では勅使たる上卿が3時頃参進し、その後御鳳輦を迎える絹屋殿へと向かう。

3時40分頃、本殿を500人の神人を伴って3基の御鳳輦は表参道を下り絹屋殿に著御する。ここで祭神と上卿は対面し、「絹屋殿著御の儀」を経て上卿の導きで頓宮へと向かう。4時15分頃、勅使列に続き御鳳輦が頓宮へと参進し「頓宮神幸の儀」が行われ、頓宮内の祭神の鎮座するための建物である頓宮殿に祭神は御鳳輦から遷られる。この頃には夜は白み始め5時頃に祭神は山上から山下へと遷り、鎮まることとなる。

5時30分、奉幣の儀が開始される。神饌が献じられ、供花が奠ぜられる。宮司が祝詞を奏し、上卿が祭文を奏す。御幣物が献じられ、御馬が牽回する。この間雅楽が奏でられるが、殊に御馬牽回の後には霊元天皇が奉納された神宝の楽器が楽人に授けられ勅楽が奏せられる。その後、頓宮の南にある地元八幡の産土神である摂社高良社へ朝御饌が献じられる。



頓宮神幸の儀

未明、篝火と提灯の灯りの中、頓宮へ向かう御鳳輦



奉幣の儀

夜明け、頓宮殿に鎮まったご神体に供花を献じる神職



奉幣の儀

早朝、御祭文を奏上する勅使の上卿

8時頃、「放生行事」が行われる。この行事こそ石清水祭の起源とされるものであり、千年以上の歴史を持つとされるものである。「諸々の霊を慰め供養するため、男山の裾を流れる放生川に生ける魚鳥を解き放つ法会を催してほしい、との八幡大神ご自身の願いすなわち神願に基づくもの」(石清水祭のパンフレットより抜粋)であったとされる。頓宮を出た神職らは放生川に架かる安居橋に進み、祝詞、大祝詞が奉唱され、胡蝶の舞が献じられる。その後、斎主、童舞人、特拝者らは川べりへ降り、放魚が行われる。令和元年には放鳥は行われなかった。放たれる魚は久御山町の東一口区自治会、京淀川漁業組合、かつて京都市伏見区羽東師にあった魚商の流れをくむ七條鮒定(川魚問屋)から奉納されている。この行事で午前中の行事は終わる。

夕刻16時30分、高良社に夕御饗が献じられる。17時、山下の頓宮殿におわす祭神が山上の本殿に帰る「還幸の儀」が行われる。18時30分頃、頓宮にて一連の神事が執行された後、祭神は再び御鳳輦へと遷り山上へ向け出立する。上卿は頓宮南門の外、高良社前に列立し御鳳輦を見送る。

表参道を3基の御鳳輦が登り本殿へ到着。本殿内で祭神は御鳳輦から外殿へ遷り、最後は普段鎮まっている内殿へ渡御される。22時頃この内殿渡御をもって一連の神事は終了する。

なお、石清水祭は勅祭と言われているが、八幡宮としては私祭と官祭に分かれるという見解を示しており、深夜絹屋殿にて御鳳輦が勅使である上卿の出迎えを受けてより、夕刻高良社前で上卿の見送りを受けるまでが官祭で、この前後の神事が八幡宮としての私祭としている。

(村田典生)

〔実施時期〕 9月14日～15日

〔実施場所〕 石清水八幡宮

〔伝承組織〕 石清水八幡宮奉職者、関係者及び参列者

〔文化財〕 未指定



奉幣の儀

上卿が御祭文を奏上した後、上卿とともに返祝詞(合拍手)を行う宮司



放生行事

放魚の前に祝詞を奏する神職



頓宮殿前に献じられた供花

# 間人の秋祭り

## 京丹後市丹後町間人

この祭りは、「間人屋台」、「けんか祭り」、「間人けんか屋台」などと呼ばれ、正式な名称も祭りの由来も定かではない。地元の人たちの話では、間人は江戸期日本海航路の港津として賑わい、現在も漁師町のため、五穀豊穡に感謝する秋祭りに屋台をぶつけ合う荒々しさがあるという。

間人は砂方、小間(または古間)、大間の3区に分かれ、各区に三柱神社が鎮座する。このうち、小間は2地区、大間は4地区に分かれ、合計7区(地区)がそれぞれ屋台を所有運行する。屋台は、大人が担ぐ大屋台と子供が担ぐ子屋台がある。

祭り前日の宵宮に屋台を組立てる。屋台は四方に竹または椎の木が立ち、吹抜内部に2名が向かい合い叩く太鼓が置かれ、各区に色分けた布団を屋根に載せ、約40名の担ぎ手により担がれる。組立て後、間人を回り、御花(御祝儀)を集めて四方の竹・椎の木に結び付ける。本祭の巡行前に、各区の区長が三柱神社の御幣を屋台の前後に差す。

本祭の午後、1名の神職が最初に砂方、次に小間、最後に大間の順番で3か所の三柱神社を回り神事が執り行われる。神職を先頭に各区の役員、御稚児、屋台が巡行する。神事は役員が参列し、神前にて神職の祝詞奏上や玉串奉奠などが行われる。

大間では、神事が始まると、約1時間にわたり、神社前の三叉路に集まった砂方を除く6基の大屋台が交替しながら2基ずつ屋台をぶつけ合う。ぶつけ合う大屋台から「ヨイサー、ヨイサー」の掛け声が発せられ、どちらかの屋台が横転するまで激しくぶつけ合う。巡行時にはドーンドーンとゆっくり叩かれていた大屋台の太鼓が、いざぶつかり合う時はドンドンと激しく打ち鳴らされる。(平原園子)

〔実施時期〕 毎年10月10日に近い日曜日  
(かつては10月10日)

〔実施場所〕 砂方の三柱神社(京丹後市丹後町間人宮の谷)  
小間の三柱神社(京丹後市丹後町間人谷の上)  
大間の三柱神社(京丹後市丹後町間人宮の下)

〔伝承組織〕 砂方区、小間区(小間東地区・小間西地区)、  
大間区(岡城・谷・向地・小泊の各地区)

〔文化財〕 未指定



御花を集める大間区の大屋台(本祭の午前中)



三柱神社への巡行の様子(小間区)



ぶつけ合う大間区の大屋台

# 荒見神社祭礼

と  
の  
城陽市富野・長池

荒見神社の秋祭りは10月1日の御霊を御旅所に遷す「おいで祭」から始まる。昔は若衆が神輿を昇っていたが、戦後は祭の期間中に御旅所に神輿を飾るだけになった。

1日の午前11時から神社本殿にて神事があり、宮司が御霊を奉持して御旅所の神輿に納めた後、御旅所祭を執り行う。御旅所には高張提灯が並び、神輿の前に古式を伝える神饌を供える。荒見神社の氏子地域のうち富野は、御旅所のあたりを境に、東富野と西富野に分かれる。東富野の森西家による森西座と、西富野の城土井家による城土井座は、協力して神饌を調達してきたが、近年は森西座だけでおこなうようになった。森西座は6軒からなるが、令和元年(2019)は不幸事で欠席者がでたため、北家が協力した(森西北座と呼ばれる)。

生姜の茎を束ねたものを土台にして柿、栗、榧の実を割竹に刺した神饌は1日の午後、宮座の人によって作成される。まず長さ25cm、直径10cmに束ねた生姜で神饌の「胴」を作る。胴には3本の足が付けられる。次に神社境内の竹を伐り、幅3cmに割って長さを24cmに整え、胴の下部に突き刺して足とする。また、竹を細く割り、長さ70cmの串を6本、30cmの串を50本作る。この竹串に山の幸を刺して胴に取り付ける。榧の実、栗は丸のまま、柿は4つに切って刺す。長い串は、根本の近くまで二又に割り、一方は栗・柿、もう一方は柿・栗の順に貫通させ、先端に榧の実を刺す。短い串は、栗を刺したもの30本、榧の実を20本作る。竹串の長いものを胴の真ん中に、短いものをその周りに刺して飾る。神饌2膳ができあがると御旅所へ運び、神酒や野菜、果物などとともに神輿の前に供える。

5日は15時から還幸祭が執り行われる。宮司が祝詞をあげ、御霊を神社本殿に戻し、5日間にわたった祭礼は終わりを告げる。(樽井由紀)

〔実施時期〕 10月1日～5日

〔実施場所〕 荒見神社(富野荒見田)、同御旅所(富野北垣内)

〔伝承組織〕 東富野、西富野、長池の3集落

〔文化財〕 未指定



生姜を束ねて作った「胴」  
竹の足が取り付けられた



竹串に刺した栗と榧



神輿の前に供えられた神饌  
神輿は移動することなくこの場に鎮座する

# 白山神社の秋祭り

宇治市白川

白山神社の秋祭りの祭礼は白川集落で収穫した食材を美しく飾った神饌、「百味の御食」を供えて五穀豊穡を祈願する。神事は10月18日の朝9時から神職によって行われるが、それに先立って神饌の準備が17日の午後から氏子によってなされる。この神饌を作って備える役を「当家」または「御膳番」という。全氏子を、白川(現在は暗渠になっている)を挟んだ東の組と西の組に分け、順番に地域的に近い3軒ずつがその役を担う。近親に不幸があると翌年にずれる。

百味とは白川の集落内で収穫した食材すべてを指し、当家が作ったもの、山林で取ってきたもの、当家以外の氏子が持参する自宅の珍しいもので賄う。年によって集まる種類が異なるので当家がノートに記録し、翌年の当家に引き継ぐ。神饌の作り方は、前もって自生するマンボという蔓草の固い茎(太めのもので長さ20cmくらい)を400本準備し、それに食材を串状に刺し、菊座南瓜を土台にして生花のように刺していく。食材の大きなものは小さく切って刺す。南瓜の中心に稲穂を束にして刺し、渦巻き状に外側へ野菜や果物を刺していく、また、中央をやや高くし周辺を低くして美しく仕上げる。なお、中央の稲穂の束は南瓜の蔓に縛り、水引で飾る。また、白川の特産品のお茶の葉を数種類、足元に飾る。

この百味の御供は当家1軒が1膳調製し、すべて同じ種類の食材を同じ数だけ刺す。元々は男性だけで準備をしていたが、最近は夫婦、家族で協力する。神饌は他に豆腐を八角形にしたものを半紙で包み、水引を掛けたものの3組、赤飯と小餅、神酒が用意される。神饌ができあがると集会所にしばらく飾っておく。この神饌は夜中の12時以降に当家が神前に供えて、夜が明けるまでに撤下する決まりになっている。(樽井由紀)

〔実施時期〕 10月18日

〔実施場所〕 白山神社、白川集会所

〔伝承組織〕 白山神社氏子

〔文化財〕 未指定



百味の御食

白川集落で収穫された100種類以上の食材が飾られる。



豆腐の神饌

八角形に切り、半紙で包み水引を掛ける。



百味の御食

マンボの茎に食材を刺して準備する。

# 木津御輿太鼓祭

## 木津川市木津

木津御輿太鼓祭は、毎年10月最終土曜日曜に木津川市の旧木津町及び氏神である御霊神社、岡田国神社、田中神社の3社で行われる行事である。「みこし(御輿)」と称する6基の布団太鼓(太鼓台)が各町内を巡行した後、それぞれの氏神社に宮入りし、境内の中を練り込む「拝殿廻り」を行う。6基の御輿は、敬神組、拝神団、義勇会、小寺町、西町、社町が所有しており、敬神組は北大路町・南大路町・橋本町・江戸町・泉町(うち江戸町と泉町は泰友組を組織)、拝神団は峠町・燈籠寺町・北畑町・南畑町・上津町・片山町、義勇会は五丁目・三桝町で組織している。かつては10月20・21日の両日、9基の御輿が揃って3社に練り込み拝殿廻りをしたが、現在は1日目に敬神組と拝神団が御霊神社、2日目に義勇会と社町が岡田国神社、西町が田中神社へ町内巡行の後それぞれ宮入して拝殿廻りを行うが、小寺町は町内巡行のみ行っている。

御輿を所有する町内の多くは年齢により「若中」「中老」「大老」と称する集団に所属しており、中でも若中が御輿の日常管理や祭礼当日の準備から後片付けまでを中心に行う。特に御輿の巡行時は若中の年長者による指揮の下、舁き手としての役割を果たす。一方、御輿に乗って太鼓を叩く乗り子は主に小学生男子(一部の町内では小学生女子も含む)が務め、背中には「しご」と称する色とりどりのちりめんを結んで乗る。拝殿廻りの時は、水引幕を降ろして乗り子のしごを御輿の外に出した状態で行い、勇壮で華やかなクライマックスを迎える。特に舁き手の確保はどこの町内も工夫を凝らしている。なかでも、近年は木津川市以外の地域から助っ人として参画する人がおり、助っ人として来てくれる人々の地元にも同様の布団太鼓系の祭礼があり、当地から助っ人として行ったかわりにそのお返しとして助けてもらう。お互いもちつもたれつとの関係を築きつつあり、新しい祭礼の担い手のあり方を示しているといえる。一方で、宮座行事が平行して行われるなど、中世以来の祭祀形態も伝承されている貴重な祭礼行事である。

このような布団太鼓を含む太鼓台系の行事は、府内では木津川市や八幡市、笠置町など木津川沿岸と、京丹後市の久美浜や間人など日本海沿岸に分布しており、瀬戸内に広がっている文化圏の東端に位置している。(向田明弘)



御霊神社で拝殿廻りを行う  
拝神団の御輿



田中神社で拝殿廻りを行う西町の御輿



岡田国神社で拝殿廻りを行う  
社町の御輿

- 〔実施時期〕 毎年10月最終土日  
(但し、10月20・21日が土日の場合は実施)
- 〔実施場所〕 御霊神社、岡田国神社、  
田中神社ほか
- 〔伝承組織〕 木津御輿太鼓運営委員会
- 〔文化財〕 木津川市指定無形民俗文化財  
(平成14年10月18日指定)

参考文献 ■ 観音寺太鼓台研究グループ編・発行  
『太鼓台文化の歴史』平成25年

# た やま はな おどり 田山花踊

## 相楽郡南山城村田山

この行事は、毎年11月3日に相楽郡南山城村田山の諏訪神社境内他で行われる。胸にカンコと呼ばれるはりぼての小さな鞆鼓を付け、背に造花や紙飾りをつけた長さ約1.5メートルほどのシナイを担った12人の中踊を中心に、口上役のシンプチや歌役、鉦打の大太鼓を打つ大太鼓打ちや貝吹き、道化などの構成でくりひろげられる風流踊である。もともとは雨乞いの際に願濟の踊として伝承されてきたが、大正期を最後に踊ることがなくなっていたため、地域の方々の強い思いで昭和38年(1963)に復活し、以降、田山の氏神である諏訪神社例祭(10月17日)に奉納されてきた。なお、11月3日に行うようになったのは平成10年(1998)からである。

当日、役者は旧田山小学校に集合し、体育館で衣装に着替える。まず、グラウンドで「愛宕踊」を3番まで踊ってから神社に向かう。その道行を入端といい、入端太鼓の拍子に合わせて境内に練り込むが、警固・はらい棒・入端太鼓、さらには棒振りやささらが多数加わり、総勢100名を超えるという大規模で華麗なものである。一行が境内に到着すると、大太鼓を踊場に据えてまず「愛宕踊」の続きを踊る。踊り終わると神夫知の口上があってその年の奉納が始まる。奉納は現在1曲または2曲で、「愛宕踊」以外の曲を適宜選ぶことになっている。田山では、「愛宕踊」の他に「庭の踊」「御殿踊」「陣役踊」「綾の踊」など全部で12曲を伝えており、府内には例の少ない風流踊の形式をよく残した伝承である。

令和元年(2019)、平成22年(2010)以来9年ぶりに「陣役踊」を踊った。田山花踊のような雨乞い習俗と結びついた風流踊は、隣接する三重県や奈良県、滋賀県などで広く行われている。特に「じんやく(陣役)／じゅんやく」踊と称する踊りは伊賀・甲賀地方に集中して踊ることが確認されているとともに、地域によっては別格な扱いをしている事例もある。田山花踊についてもこのような一連の伝承の中で比較検討することができる貴重な伝承の一つであるといえる。

(向田明弘)

参考文献 ■ 京都府教育委員会『京都府の民俗芸能』平成12年  
■ 田山花踊保存会結成50周年記念事業実行委員会『田山花踊保存会結成50年のあゆみ 田山花踊り』平成27年



旧田山小学校校庭で愛宕踊を踊る様子



警固を先頭に神社に練り込む様子



太鼓の上で神夫知が口上を述べる様子



諏訪神社境内で陣役踊を踊る様子

〔実施時期〕 毎年11月3日  
(かつては10月17日)

〔実施場所〕 諏訪神社、  
旧田山小学校グラウンド

〔伝承組織〕 田山花踊保存会

〔文化財〕 京都府指定無形民俗文化財  
(昭和59年4月14日指定)

# 祭りが行われる縁日の由来

京都の三大祭の葵祭(5月15日)、祇園祭(7月17日・24日)、時代祭(10月22日。ただし令和元年は10月26日)、そして京都五山送り火(8月16日)を加えた四大大行事は、曜日に関わらず決まった日に開催しています。このように、伝統行事の多くは、行われるべき日が決まっていました。

お祭りというと、露天商による仮設の店舗が立ち並び「縁日」が楽しみという人も多いのですが、縁日とは本来、神仏に縁のある日という意味です。お釈迦様の誕生日が4月8日で仏生会・灌仏会、入滅した日が2月15日で涅槃会・常楽会が催されます。12月25日のクリスマスは、いわばキリスト誕生の縁日です。

祇園御霊会(祇園祭)は、由緒を記した記録のなかで最も古いとされる「社家条々記録」(元亨3年/1323年成立)に「天延二年六月十四日、御霊会を始行せらる」とあり、祇園祭は最初に行われた日を縁日として続けられてきました(新暦になって7月に変更)。

縁日の由来のひとつに「三十日秘仏」があります。五代十国時代(907～960年)、中国の五祖山の戒禪師が、1か月の30日に、それぞれ1つの仏を配置して念仏(仏の名を唱えること)したことが始まりとされます。13世紀成立の釈智愚撰『虚堂和尚語録七』(「聖旨請跋毎月念仏図」の項)に「毎月念仏の図は戒禪師の編するところなり、初<sup>(1日)</sup>より定光仏をはじめとなして、三十日釈迦世尊に至る、終りてまた始る」とあるのが知られています。この30日で一巡する仏の縁日は、12～13世紀には日本にも伝わっていたといわれます。近年、土曜日・日曜日に行われることが多い地蔵盆ですが、本来は地蔵菩薩の縁日の24日に、大日盆は大日如来の縁日の28日に行われてきました。

また、最澄(伝教大師)が神仏習合の思想から比叡山に祀ったのが最初とされ、のちに日蓮宗で盛んに信仰された三十番神も、30日にそれぞれ神霊を配置

さまざまな縁日

日	三十日秘仏	三十番神	その他
1	定光仏	熱田大明神	妙見菩薩
2	燈明仏	諏訪大明神	
3	多宝仏	広田大明神	
4	阿 如来	氣比大明神	
5	弥勒仏	氣多大明神	水天宮
6	二万灯仏	鹿島大明神	
7	三万灯仏	北野大明神	
8	薬師如来	江文大明神	
9	大通智勝如来	貴船大明神	
10	日月灯明仏	天照皇太神	金毘羅
11	歓喜天・聖天	八幡大菩薩	
12	難勝仏	加茂大明神	
13	虚空蔵菩薩	松尾大明神	
14	普賢菩薩	大原大明神	
15	阿弥陀仏	春日大明神	
16	陀羅尼菩薩	平野大明神	
17	龍樹菩薩	大比叡権現	千手観音
18	観世音菩薩	小比叡権現	
19	日光菩薩	聖真子権現	
20	月光菩薩	客人権現	
21	無尽意菩薩	八王子権現	弘法大師
22	施無為菩薩	稲荷大明神	聖徳太子
23	大勢至菩薩	住吉大明神	
24	地蔵菩薩	祇園大明神	愛宕権現
25	文殊菩薩	赤山大明神	天神
26	薬上菩薩	建部大明神	
27	盧舎那仏	三上大明神	
28	大日如来	兵主大明神	不動明王
29	薬王菩薩	苗鹿大明神	
30	釈迦如来	吉備大明神	
甲子			大黒天
寅			毘沙門天
巳			弁財天
庚申			帝釈天
午			稲荷明神
亥			摩利支天

したものです。

神社の祭礼などの多くは、その土地や神社の固有の由緒があり、行事の内容や日程なども、もともと何か意味があったと考えられます。例えば民俗学では、そういった当たり前のこととして伝承されてきたものを資料として、その土地の歴史を研究しています。

(福持昌之)

# 「伝統文化親子教室」のすすめ

地域の伝統行事が直面している課題としてよく聞くのが、参加者の減少、後継者の不足です。少子高齢化を背景に、勤労世代に余裕がなく、子供も学校や塾、スポーツやお稽古で忙しいとのこと。特に新しく引っ越してきたご家庭にとっては、何かきっかけがないと地域の行事に参加しにくいかもしれません。

重要無形民俗文化財「京都の六斎念仏」では、平成15年度(2003)から文化庁の「伝統文化親子教室」(当時は「伝統文化こども教室」)を活用して地域の小・中学生を対象に体験や練習ができる取り組みを続けており、そこで育った人材が後継者として活躍し始めています。

この事業の対象となるのは、文化芸術基本法に示された「伝統芸能」「生活文化」「国民娯楽」「地域固有の伝統芸能及び民俗芸能」「暮らしの文化」などです。

地域の伝統文化の保存会だけでなく、自治会・町内会、あるいは学生サークルなど有志のグループでも申請ができますが、1回あたり45分以上の教室を年間5回以上の開催することなどの条件があります。また、補助額は50万円以内で、講師謝金(内部講師は別基準)、会場費、募集チラシ制作費、貸出用の用具購入費は補助対象となりますが、子供たちが使う消耗品などは補助対象外です。募集時期は前年度の10～11月頃です。

各回を練習にあてる以外にも、鞍馬火祭保存会による鞍馬火祭の教室のように、ガイダンスや見学、感想文を書いて振り返るというプログラムも可能です。たとえば、右の例のように、地域の伝統行事をすべて網羅するような教室を企画してみてもいかがでしょうか。(福持昌之)

平成 29 年度の採択状況

大分類	分野	件数	小計	%
民俗芸能	イ. 神楽	75	473	11.9%
	ロ. 獅子舞	91		
	ハ. お囃子	190		
	ニ. その他の民俗芸能	117		
祭行事	ホ. 祭行事	181	181	4.6%
伝統芸能	ヘ. 民謡民舞	55	979	24.6%
	ト. 和太鼓	203		
	チ. 能楽	123		
	リ. 邦楽	242		
	ヌ. 邦舞	356		
伝統工芸	ル. 伝統工芸	50	50	1.3%
国民娯楽	ヲ. 百人一首・カルタ	151	429	10.8%
	ワ. 囲碁	125		
	カ. 将棋	153		
生活文化	ヨ. 華道	858	1,396	35.1%
	タ. 茶道	456		
	シ. 書道	82		
武道	ソ. 武道	70	70	1.8%
その他	ツ. その他の分野	397	397	10.0%
		3,975	3,975	100.0%

※ 採択団体数は3,508だが、分野がまたがる場合があった。

「地域の年中行事」計画の例

教室/発表会・大会の内容		回数	日程(予定)	曜日	時間(※1)
教室	ガイダンス：地域の年中行事の概要、自己紹介	1回	4月21日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	端午の節句：行事の説明、折り紙で兜を折る	1回	5月5日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	七夕：行事の説明、短冊を書いて飾る	1回	7月7日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	祇園祭：行事の説明、宵山の会所飾りを見る	1回	7月21日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	盆踊り：盆踊りの練習	1回	8月3日	土	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	地藏盆：行事の説明、地藏盆に参加する	1回	8月25日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	お火焚き：行事の説明、煙を浴びる	1回	11月9日	土	[始] 14:00 [終] 16:00
教室	書初め：習字をする	1回	1月5日	土	[始] 14:00 [終] 16:00
発表会	感想文を書いて、発表する	1回	1月13日	日	[始] 14:00 [終] 16:00
					[始] [終]

※1 学校の授業にあたる時間帯等(文化祭や運動会などの学校行事を含む)を利用して教室を開催することはできません。

実施回数	教室	8回	合計	9回
	発表会・大会	1回		

詳しくはこちら→ <http://oyakokyoshitsu.jp/>



### 3 井上頼寿が残した記録



# 井上頼寿

## —京都の祭り，民俗を調べた人—

井上頼寿(1900～1979)は、京都府，滋賀県，奈良県など、近畿地方の民俗の調査を行った人物である。

頼寿は、伊勢神宮が鎮座する三重県度会郡宇治山田町(現在の三重県伊勢市)に生まれ、同地にあった神宮皇學館を大正12年(1923)に卒業した。大正13年に教諭として京都府立第二中学校へ赴任したことから、京都へ移住した。以後、同地を拠点として活動し、京都の祭りや民俗に関わる数多くの著作を残している。

主な著作に、

- 『京都民俗志』(西濃印刷株式会社岐阜支店，昭和8年)
- 『京都古習志』(館友神職会，昭和15年)
- 『京の七不思議』(郷土文化研究会，昭和19年)
- 『洛南』(室書房，昭和23年)
- 『京菓子』(推古書院，昭和25年)
- 『近江祭礼風土記』(滋賀県神社庁，昭和35年)

ほかがある。

『京都民俗志』(西濃印刷株式会社岐阜支店版)は、京都を中心とする地域の古くからの言い伝えや伝説等を、鳥居・井・石・習俗・植物・動物・洛中洛外に分類して記録したものである。なお、後に同書の改訂版が平凡社(東洋文庫129, 昭和43年)より刊行されており、この改訂版には「鳥居」の項目はない。

その研究手法は、頼寿自身が「鳥居を探す」(『館友』633号, 昭和11年)で述べるように、理論を避けて実証的に研究し、客観的な事実・資料(研究のための材料)を並べ、その比較によって、資料そのものに本質を語らせようとするものである。

このような研究態度は、著書からもうかがうことができる。そこには、自身が見聞きし、集めた事実や資料が列記され、ほぼ個人的な見解はみえない。

このため、井上の『京都古習志』は、それぞれの地域における祭りを調べる上で、貴重な情報を提供してくれる。

また、これらの著書は、膨大なメモ・ノート類をもとに執筆された。(大東敬明)



井上頼寿の研究ノート『京之山』No.8  
〔國學院大學蔵〕



木津・太鼓祭(『京之山』No.8〔同〕)



栗田祭(『京之山』No.8〔同〕)

# 井上頼寿旧蔵資料

## — 京都の祭り，民俗の記録 —

國學院大學(東京都渋谷区)が所蔵する「井上氏旧蔵資料」は、国学者の井上頼圀(1839～1914)、伊勢神宮の禰宜や神宮皇學館の教授をつとめた頼文(1861～1932)、京都を中心に近畿地方の民俗を調査した頼寿の資料群である。頼圀が、かつて國學院大學の経営母体であった皇典講究所の創設・運営に深く関わったことから、平成19年4月に井上頼輝氏の御篤志により、寄贈された。

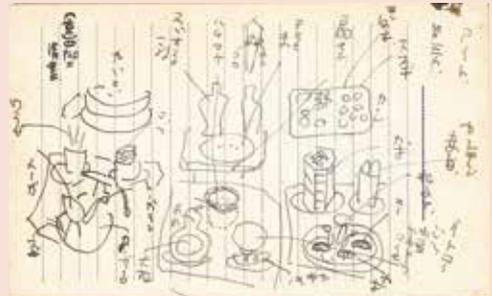
この一部に井上頼寿の調査ノート・メモ類がある。同資料は全体で、約650点(令和元年9月14日時点)が確認されている。その中心となるのは、『京之山』と題するノート(42冊、大正13年～昭和10年頃)と、『葛葛』と題するメモ帳(132冊、大正13年～昭和11年頃)である。

頼寿は、まずメモ帳に見聞きした事柄を記し、それをノートにまとめていくという手法をとっている。ノートには、「神祇」「神饌」といった副題が付されたものがあり、また、表紙にはキーワードが付され、目次も付される。

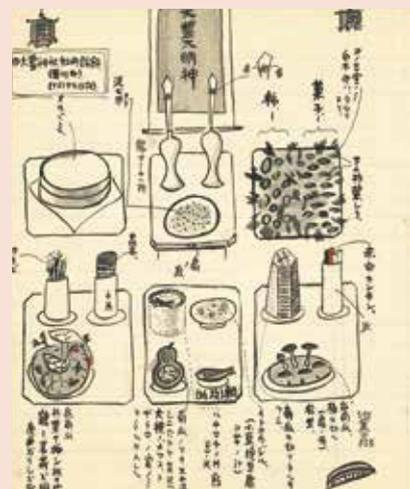
例えば、『葛葛』No.7(大正14年10月～)には、大豊神社祭(10月19日調査)、北白川天神祭(10月20日調査)ほかの情報が記録されている。このうち、神饌の絵は、『葛葛』巻7段階では、メモであるが、『京之山』No.4(主トシテ神道ニ関スル資料)(大正14年10月15日～同15年6月15日)には、清書されている(「大豊神社牡丹鉦飾」「白川天神祭三之鉦飾」)。

これらのノート・メモ類は、井上頼寿の著書・論文の材料になったものであるが、それとともに大正末期から昭和前期にかけての京都周辺の祭りの資料として、貴重なものと評価される。

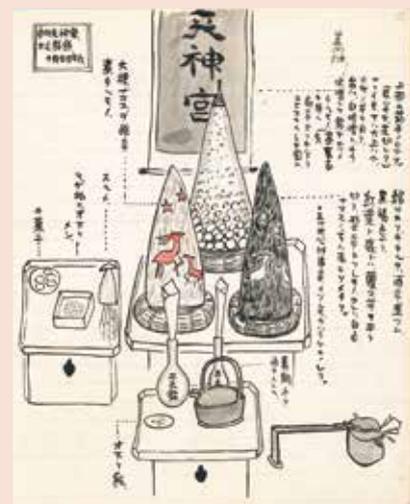
現在、國學院大學は京都府及び京都市と連携して本資料群の共同調査に取り組んでいる。(大東敬明)



大豊神社牡丹鉦飾  
〔『葛葛』No.7〔國學院大學蔵〕〕



大豊神社牡丹鉦飾 (『京之山』No.4〔同〕)



白川天神祭三之鉦飾 (北白川天神祭)  
〔『京之山』No.4〔同〕〕

# やすらい祭

京都に住んだ民俗学者・井上頼寿は、大正14年(1925)・15年に今宮神社(京都市北区)へ「やすらい祭」を見に行っている。

やすらい祭は、現在、4月第2日曜日に行われ、花を飾った風流傘を中心にして、鞆鼓を胸に付けた少年、赤毛や黒毛を被った人々が行列し、また、今宮神社ほかではお囃子に合わせて踊る。

大正15年4月10日の記録は、頼寿の調査時のメモ帳『葛葛』No.10, ノートである『京之山No.4(主トシテ神道ニ関スル資料)』(大正14年10月15日～15年6月15日)に記されている。『京之山』No.4は、『葛葛』No.10の記録を清書したものである。ノートには、境内、花を飾った風流傘、よたれ(花棒)、本社に置かれた幣などの図が丁寧に描かれている。

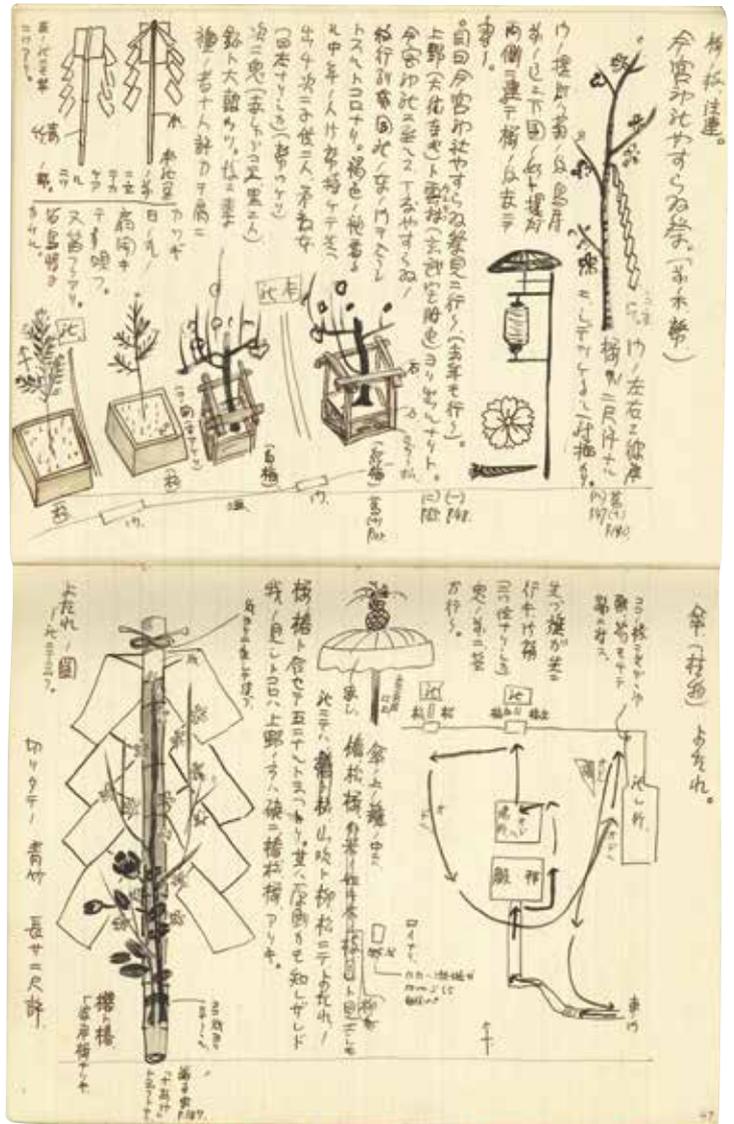
同日、頼寿は、まず平野神社(京都市北区)の桜花祭へ行き、次に今宮神社へやすらい祭を見に行っている。平野神社の門の左右には、紙垂を付けた彼岸桜がつけられており、やすらい祭のページの冒頭にこれを描いている。

今宮神社へ着いたときに、ちょうど東の門からやすらいの行列が入ってきたところであった。同年は、上野(大徳寺北)と雲林院(玄武神社付近)から出ていたと記す。

風流傘について、「傘の上の籠の中には椿、松、桜、柳と見えたけれども、神社では、山吹、柳、松であって、よたれの桜、椿と合わせて「五」になるといっている。それは原則かもしれないが、自分が見たところでは、上野の方確かに椿、松、桜があった」と書いている。なお、頼寿の代表的な著作である『京都古習志』(館友神職会、昭和15年)では、「風流傘(紗綾の垂衣が有り頂には椿松柳山吹を挿す[以下略])」(171～172頁)としている。また、『京之山』No.4に「風流傘の中に入れば、疫病にかからないとされ、特に子供を入れる、自分も入った」と書き留めている。

さらに、頼寿は、桜と椿を付け、今宮神社の本社に奉られた「よたれ(花棒)」に興味を持ったようである。「よたれ」について『京之山』No.4には、その形状を描き、説明を付している。これは、本社に飾られていたものを、社務所へ持ってきてもらって、描いたという。

(大東敬明)



『京之山』No.4 [國學院大學所蔵]

# 木津御輿太鼓祭

井上頼寿は、大正15年(1926)10月21日、木津御輿太鼓祭を見学に行った。この時の記録は、彼の手帳である『蔦葛』No.19、ノートである『京之山No.8(神祇特輯)』(大正15年6月5日~昭和4年1月6日)に収められている。

『蔦葛』No.19によれば、頼寿が木津駅に降りたのは、午後のことであったようである。太鼓祭りについて聞き、「昨日、御霊神社が終わり、今日の午前(ごりょう)に田中神社が済み、午後(おか)に岡田国神社が行われる」と教えてもらっている。

まず、頼寿が注目しているのは、祭事の責任者である「本当」(ほんとう)の家の前に張られた注連縄(しめなわ)や、その横に作られた壇(だん)である。この壇には、竹で作った御幣3本が立てかけられている。

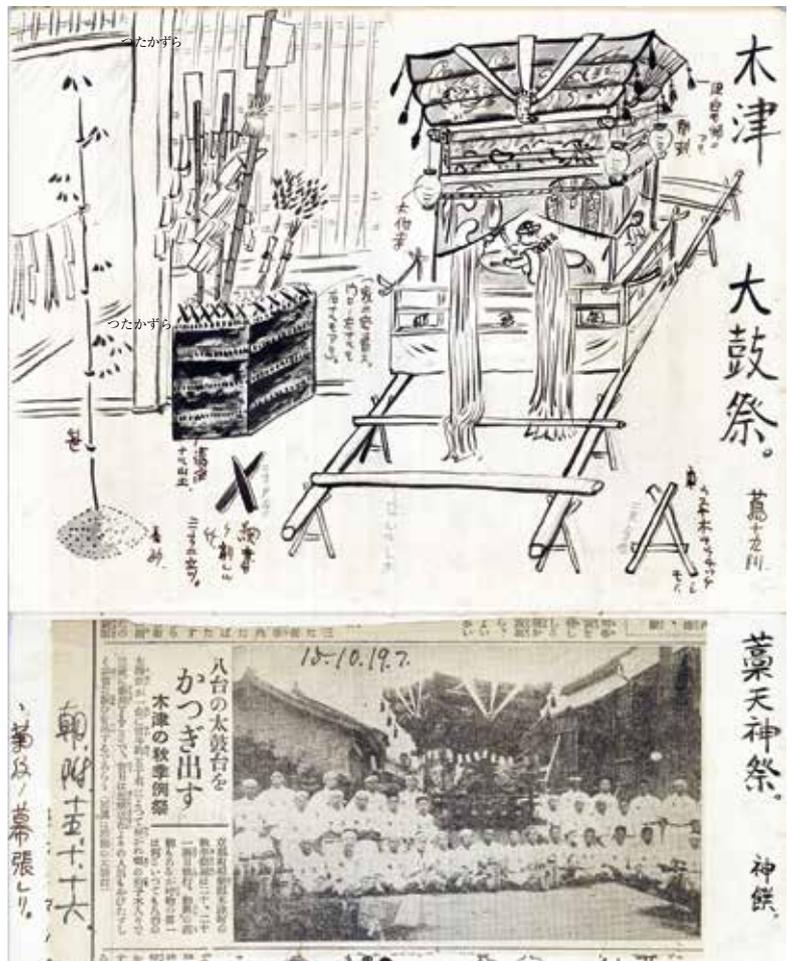
岡田国神社へ着いたとき、祭典の執行中であった。『京都古習志』(井上頼寿著、館有神職会、昭和15年)では、木津には16(近年は17<当時>)の宮座

があったとし、『蔦葛』No.19には各宮座の「一老」(座のうち、最年長の者)が奉る「注連」「幣束」「七味(あるいは百味の飯食)」(あるいはひやくみのおんじき)を描いている。「七味」とは、クルミ、梨、柘榴、榎、栗、ナツメを一包として、別に柿(かき)を土器(かわらけ)に載せたものである。柿は必ず「とよおか柿」を用いる。

祭典が終わると、太鼓御輿が入って来た。太鼓御輿では太鼓を叩く子供も、担ぐ大人も「アラヨイヨイヨイ」「ヨイトコセー」と掛け声をかける。子供は10歳くらいであると頼寿は書いている。御輿は拝殿を3周し、2周目には「サーセヨ、サーセヨ」といって御輿を高く掲げ、3周目には「ドンドン」「サッサ」「ヨイヤサ」といって退くとする。

このほか、宮座の祭り食物として、藁(わら)で挟んだ豆腐を赤味噌で煮た座豆腐についても聞き書きをしている。頼寿は、岡田国神社の「七味」や「座豆腐」について、『京菓子』(推古書院、昭和25年)でもふれている。

このメモのうち、「本当」の注連縄や壇、御輿太鼓は『京之山』No.8に清書された。(大東敬明)



『京之山』No.8 [國學院大學所蔵]

# ほうしゃくじ 宝積寺の鬼くすべ(追儼)

昭和4年\*・5年(1929・1930)の4月18日、井上頼寿は、宝積寺の「鬼くすべ」にでかけた。この時の記録は、頼寿の調査メモ『葛葛』No.53, No.77に記される。『葛葛』No.53は、行事の進行に沿って記され、No.77は、道具や鬼のスケッチを主とする。これらには、福豆を撒く櫓、鬼や福神、餅ほか様々なスケッチが描かれている。なお、「鬼くすべ」について、頼寿は「山崎宝寺追儼」と書いている。

現在、「鬼くすべ」は日中に行われているが、当時は夜間に行われていたようである。『葛葛』No.53には「八時四十分了」(法会の終了時間)など夜間の時間が記され、さらに福豆撒きの際に提灯を付けてとある。また、『京都古習志』(井上頼寿著、館友神職会、昭和15年)では、「枡から豆を夜空に撒くと一同之を拾ふ」(362頁)とある。

この行事では、本堂の内陣と外陣の境の梁に、青竹に挟んだ餅を下げる。頼寿は、この図を描き、「餅ハ七十五個、昔ハ巾三尺ナリキ、昔餅料三石七斗五升上りキト(僧談)」とする。

現在は法会が終わった後に福餅を撒いている。頼寿が観に行った際には、法会が終わったのち、福の神(大黒、恵比寿)の格好をした人が櫓に登って福豆を撒き、また本堂正面で僧も撒いた。この時に、新聞紙に包んだ一辺6センチ(2寸)ほどの正方形の札も撒いた。これは、一種の福引のようなもので、札に番号がついており、これを手帳、玩具、米などと引き換えていた。櫓は、木と木のあいだに作られた。

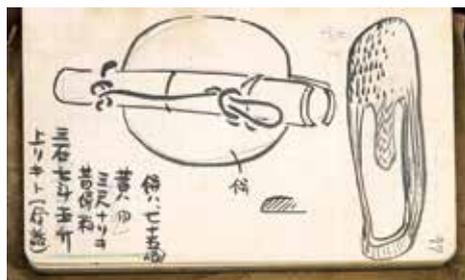
また、大黒と恵比寿と思われる人物も描く。大黒と思われる方は、濃い青(あるいは紺)の袋を右肩にかけ、袋の口は前に持っているとする。(大東敬明)



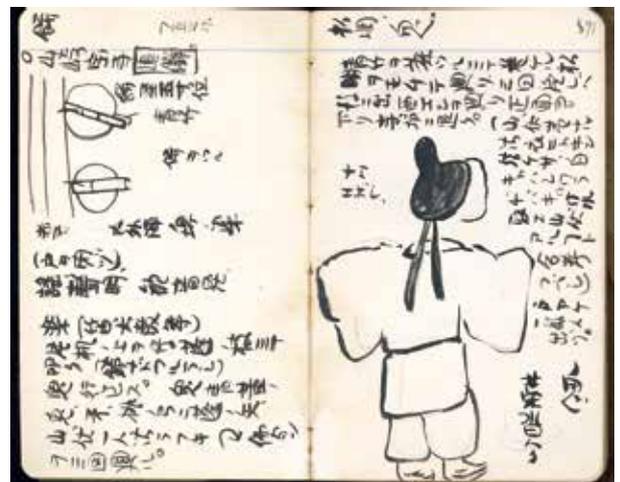
福豆撒きの櫓 (『葛葛』 No.53 [國學院大學所蔵])



鬼と福神 (『葛葛』 No.53 [同])



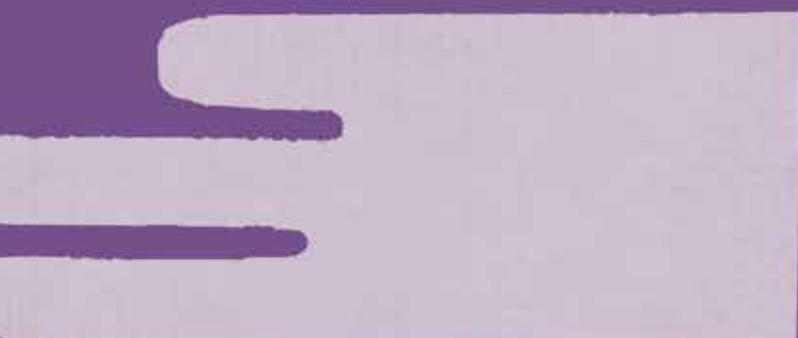
餅 (『葛葛』 No.77 [同])



餅と鬼 (『葛葛』 No.77 [同])

\*『葛葛』 No.53 には、調査年は付されていない。しかし、前後の番号の手帳が昭和4年であることから、同年と推定した。

# 4 資料



## 京都府「祭り・行事調査」とその着眼点

日本の伝統行事の多くは、そこに住まう人々が共有する様々な想いが込められています。そこには、歴史的な経緯もあれば、地域社会での生活の智恵と工夫によるものもあります。いずれにせよ地域ごとに特色があり、祭礼行事、宗教行事、民俗芸能、郷土芸能など様々なイメージを含みます。

東日本大震災（2011年）では、ライフラインなど物質的な復旧がまだ途上であったにも関わらず、早い段階で伝統行事など精神面の復興も進められました。ありあわせの道具を使い、参加できる人数が少なくても、獅子舞や神楽、祭礼行事などを開催することで、地域の結集と復興を象徴し、人々に生きる勇気を与えたのです。

日本の伝統行事は、連綿と続けられてきたものばかりでは決してありません。江戸時代やそれ以前から続く行事もありますが、戦後の諸制度の改革、高度経済成長や産業構造の転換、生活改善運動、さらには近年の情報化社会、人口減少、少子高齢化など、様々な要因によって変化、変質、中断をはさみながら、現代に受け継がれてきました。特に、その伝承基盤である地域にとっては、コミュニティのあり方が大きく変化しつつある今、地域の伝統行事も変化、あるいは省略・休止などといった「選択」が迫られています。

京都府教育委員会では、このように変わりつつある地域の伝統行事について、その現状の把握を目指して平成9年（1997）度から同11年（1999）度にかけて、府内全域を対象にした「民俗芸能緊急調査」を実施しました。その成果は『京都府の民俗芸能—京都府民俗芸能緊急調査報告書』（2000年3月発行）にまとめられています。それに続く調査事業として、平成30年度から4か年の予定で「祭り・行事調査」に着手しています。

京都府では、市町村の協力を仰ぎつつ、府内全域の悉皆的な調査を目指しています。京都府の委嘱を受けた基礎調査員が、地域ごと（主として旧村単位）に一年間に行われる行事について聞き取り調査を実施し、祭り・行事の一覧表を作成します。それと並行して、いくつかの事例については、詳細調査員による実地調査が行われ、調査報告が作成されます。それらの成果は、数年後に刊行予定の調査報告書に収録されるほか、様々な形で発信される予定です。

この「祭り・調査調査」事業は、文化庁が指導・推進し、都道府県が実施する文化財調査事業のひとつで、調査項目については、文化庁が示す全国共通のテーマと、都道府県が独自に設定するテーマから構成されます（表7）。

これらのテーマを通覧すると、地域の伝統行事がいかに多様であるかを実感することができます。この調査を通じて、今まであまり知られていなかった行事が全国的にも珍しいであるとか、たくさんあって当たり前だと思われていた行事がその地域だけに顕著なものであるとかいった新しい事実が発見されるかもしれません。また、地域の活性化や観光資源になる可能性も秘めています。

京都府祭り・行事調査 調査票(様式1)

調査地区	市 町	地区番号
------	--------	------

有無	祭り・行事の 名称・呼称・俗称	祭日	行われる場所	祭り・行事の概要(準備・宵宮・本祭・後宴などを具体的に)				伝承組織 (座・旗・区・保存会)	備考
				準備	内容	神饌	芸能		
1	例:〇〇神社秋祭、〇〇神社大祭など								
2	例:〇〇社祭など								
3	例:粥占い、茗荷祭、田植祭、綱引きなど								
4	例:きつねがり、さんやれ、おんごどん、十三参りなど								
5	例:烏帽子着など								
6	例:オコナイ、大般若経転読など								
7	例:勤請縄、禊さしなど								
8	例:トンド、左義長など								
9	例:テンドウバナ、ショウブなど								

記入者	記入年月日 年 月 日		
記入方法	A 実見 ( )年	B 聞き取り ( )年	C 文献 「タイトル」編著者 出版社 出版年

様式1

調査地区	市 町	地区番号
------	--------	------

有無	祭り・行事の 名称・呼称・俗称	祭日	行われる場所	用具	祭り・行事の概要(行事の進行にあわせて簡潔に)			伝承組織 (座・旗・区・保存会)	備考
					内容	神饌	芸能		
10	例:迎え火、六道詣りなど								
11	例:送り火、万灯など								
12	例:松上げ、マンドロなど								
13	例:〇〇町の地藏盆など								
14	例:お火焚き、大根焚きなど								
15	例:オシマ参りなど								
16	例:伊勢講、愛宕講、大師講、日待など								
17	例:山の神、野神、田の神など								
18									
19									



### (ゼスト御池)

- とくに有名な祭礼でなく土俗的というか、京都でもあまり知られていない仏教、神事の紹介は勉強になった。以上、大変良い催事です。歴史を知る■■■(判読不能)になります。
- 実家のある大阪府南河内郡千早赤阪村のお祭りについて回答します。秋祭り/千早赤坂村中津原地区・中津神社中心/10月19日・20日/だんじりを地区中を練り歩くとともに、獅子舞をおこなう。
- (こんちきジーズは)学生主体の調査を行っておられ、その視点や結果がとても興味深かったです。知らないお祭りやその裏方のことがわかりました。ありがとうございます。
- 祖父、井上頼寿の書いた字がなつかしく、たいへん興味深く見ました。
- 曾祖父、井上頼寿の資料を見に立ち寄りしました。今後も是非活かしていただければと思います。
- 葬式の変化を見て、やめる方向、より簡略化へと進めている。(愛宕講)地蔵盆/一乗寺(左京区)/今は8月23日だけ/旧町内が拝んで少しの雑談時間をもつ
- (こんちきジーズは)学生が積極的に関わりPRしてすばらしい。鎌倉・長崎に関わっているが、行政がダメ。京都市会一般質問本会議とも傍聴後に通ったが、行政に関わっている議員や市長も少しは見習うべき。らんたんフェスティバル/長崎/2月/中華街中心に中国の正月を祝う。おくんち(長崎くんち)/10月初旬/ダン出巡り。鎌倉五所神社例祭/6月中旬/海に神輿が入る。
- (こんちきジーズに)自分も少し関わっているので、面白かった。
- 祇園祭の幼少時からの思い出が多く、鷹山にも期待。以前にパンフ?を手に入れていて、ゼストでも過去展示有りと知っていましたが、たまたま通りがかりに来ました。
- 久多の写真があればよかった。
- とても内容が濃く、全部読むのに時間がかかりました。くたくたになりました。でも、おもしろかったです。
- 京都の地域に根差した行事を知ることができ、大変興味深く拝見しました。また、若い方々が調査や研究に関わることで、行事の存続にも新たな方向性が見えてくるのでは、と思います。
- いろいろ。
- 祇園祭に一層の興味を抱きながら、SDGsに行政、学生(大学)と名だたる企業が入っていることも、印象深い。だんじり祭/神戸市東灘区/5月GWあたり/地区の10基の集合パレードあり
- こんちきジーズという活動を始めて知りました。総まとめの結果は公表されるのでしょうか。(長岡京市には)古いお祭りはほとんどありません。神社の祭りも形だけみたいです。
- (こんちきジーズは)8班の内容がよかったです。がんがら火祭り/大阪府池田市/8月24日/「大」「一」の文字献灯
- もっと京都には行事があるので、一部だけでなく広く深く探ってほしい。
- 資料がほしい。パンフでは、どの様なことをするのかわからなかった。実演とか?
- 秋祭/北区紫竹/11月3日/神輿練りあり
- (こんちきジーズは)2班の温度のデータは、特に興味深かった。
- こんな良い展示有難うございました。京都市内→宇治市に在住し60年近くなりました。生活と共に在る祭り、しきたり、若い頃からもっともっと知っていれば良かったと…、もう一度来ます。
- この度の展示、ご苦労様です!! ①写真がたくさん用いられており、具体的に解りやすかった。②パネルの文字の大きさがgood! ③奥深く、まだまだアル内容物と思わすが、一般の人々に解りやすい程度のコトにして頂きたい。読む人は、色々というコトを念頭に。読まれなければ、意味がないと考えマス。④京都にずっといるが、色々あるコトを改めて気づかされた。(奥深さ)
- 電話番号知らない祭りも多く、興味深い。次に伝える事が簡単でないことも理解。
- 京都に居ながら、京都の歴史を知らずにいます。今回の展示はと

てもよかった。今後も、この様な展示をお願いします。

- 代表的な祭ではなく、地域に残る古い伝統的な歴史を取り上げるところに熱意を感じる。若者たちが引き継ぎつたえていける様、地域への金銭的協力が根元にあると思うので、公的システムを広げてほしいと思う。
- 伝統を大切に、綿々と生き続けている。維持する心、忍耐力、尊敬します。地元のひとびとは、何を大切にしているのでしょうか。何かがある、歴史がある、歴史と人の結びつきが、このような展示にもつながるのでしょうか。
- 下御霊神社祭礼/中京区/以前は5月18日に決まっていたが、何年か前より18日に近い日曜日におこなわれている
- そのまま冊子にしてもよさそうなのが多かった。ゆっくり読んでみたい。
- 地域ごとのお祭りの特色が詳しく調べられていて、興味深かった。調査報告書が楽しみです。神輿祭(新明神社)/右京区嵯峨柳田町/6月第1・第2日曜/おいで、おかえり、神輿巡幸、境内で子供たちにヨーヨー釣り、団子など配布。
- もう少し写真があると良かった。
- 立命館大学の授業の中で、講師から紹介されて見に来ました。
- 小学校での体育祭のお世話をさせていただきましたが、これも大切な伝統なのだ気付かせていただきました。御香宮祭礼/伏見区中書島から丹波橋にかけて/10月5日~10月中旬/神輿・花傘巡行

### (京都学・歴史館)

- 同じ左京にいながら、全く見ていない祭りもあり、歴史の長い京都はすごいと思います。
- 地元乙訓の勉強もして、今年、大山崎町の鬼くすべを知り、観に行く予定でしたので、展示があり興味が深まりました。鶏冠井題目踊/向日市石塔寺/毎年5月3日。
- お千度/上京区突抜町/3月中旬。ずいき祭/西之京/10月1~4日/ずいき神輿公開巡行。地蔵盆/上京区突抜町/数珠まわし、福引、子供ゲーム、すいか割、等。
- 文書の要点をていねいにまとめてあり、分かりやすい。現在と往時を歩き来て読んで学ぶことができる。スペースの関係で少し見にくい時がある(やむなし)。さんやれ祭/上賀茂地区/2月24日/今でいう成人を祝う行事。
- 地域の行事が段々とおこない難くなっている。高齢化と少子化。私の住む町では何とか地蔵盆と木嶋神社の祭礼は行われていますが。
- 自分の幼い頃のお祭りもあり、とても楽しく見させてもらいました。昔から現在まで、行われている事に、町衆(地域の方)のつながりを感じます。
- 祭りや行事には関心があがり、メジャーでない行事も紹介されていて良かった。
- お千度/右京区/11月初日曜日/町役員が代表(30人程度)して松尾神社へ参拝する。
- 色々知らない。知見できました。
- ちょっと文字多い。地蔵盆/中京区聚楽廻町下町/8月15~16日/数珠練り、子供のゲーム、町内会の親交。
- 各地域で多様な祭りが残り、今も行われているよさを、興味深く拝見しました。パネル展示が中心でしたが、造作物の展示などがあるとより実感できたと感じました。地蔵盆/中京区西ノ京北壺井町/近年は夜の住民あげてのバーベキュー、焼きそばなどを囲みでの交流が盛んになってきている。

### (山城郷土資料館)

- 説明ありがとうございます。
- 大変なつかしく、楽しく観させていただきました。

## 資料 3 京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会について

### 京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会規約

- (名称)  
第1条 本会は、京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会(以下「実行委員会」という。)と称する。
- (目的)  
第2条 実行委員会は、地域の貴重な財産である伝統的な行事が再評価され、地域の活性化に資するよう活用されることを目指し、様々な老若男女に対して普及啓発を図ることを目的とする。
- (組織)  
第3条 実行委員会は、第2条の目的に賛同し、第4条の事業に協力する者で、会員1人以上の推薦で理事会の承認を得た者とする。
- (業務)  
第4条 実行委員会は、前条の目的を達成するために必要な事業に関する企画及び運営に関する一切の業務を行うものとする。
- (役員)  
第5条 実行委員会には、次の役員を置く。  
委員長 1名  
副委員長 1名  
会計 1名  
委員 若干名  
監事 1名以内
- (役員の職務)  
第6条 委員長は、実行委員会を代表し、会務を総理する。  
2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。  
3 会計は、実行委員会の経理を担当する。  
3 監事は、実行委員会の業務及び会計の状況を監査することを職務とし、第9条に定める議決権を有しない。
- (任期)  
第7条 委員の任期は2年以内とし、再任を妨げない。  
2 委員に補欠等により選任された委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- (会議)  
第8条 実行委員会は、委員長が招集し、委員長が議長となる。  
2 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見又は説明を求めることができる
- (議決事項)  
第9条 実行委員会は、次の各号に掲げる事項について審議し、決定する。  
(1) 事業計画及び事業報告に関する事項  
(2) 予算及び決算に関する事項  
(3) 規約の改廃に関する事項  
(4) その他委員長が必要と認めた事項
- (会計)  
第10条 実行委員会の経費は、負担金、補助金、寄付金、事業の開催に伴う収入及びその他の収入をもって充てる。
- (会計年度)  
第11条 実行委員会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終わる。
- (解散)  
第13条 実行委員会は、第4条の業務が完了したときに解散する。
- (補則)  
第14条 この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が定める。
- 附 則  
この規約は、平成29年11月8日から施行する。

### 京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会名簿

役職名	氏名	所属団体名 職名
委員長	天 野 文 雄	京都造形芸術大学舞台芸術研究センター 所長・教授
副委員長	秋 田 吉 博	公益社団法人全日本郷土芸能協会 理事
委員	伊 藤 勲	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 担当課長
委員・会計	福 持 昌 之	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 文化財保護技師
監 事	北 田 栄 造	公益財団法人京都市文化観光資源保護財団 事務局長

## 企画・運営

- 天野 文雄 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター 所長・教授  
○ 福持 昌之 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 文化財保護技師  
今中 崇文 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 文化財保護技師  
竹市 直彦 自然堂株式会社 代表取締役

○はリーダー

## 協力機関（者）

河窪 素子	[ゼスト御池／丸紅リアルエステートマネジメント株式会社]	
家村 公崇	[吉忠マネキン株式会社]	
浅利 美鈴	安藤 悠太	奥野 真木保
西本 早希	白井 亜美	山口 真広
久保 文乃	後鳥 友里	谷合 敬太
田中 千尋	駒ヶ嶺 光	野々山 千晴
山田 千聖	上田 友弥	[エコ〜るど京大]
平井 俊行	横井 かをり	吉岡 直人
川口 成人	寺嶋 一根	杉本 弘幸 [京都府立京都学・歴彩館]
細川 康晴	伊藤 太	横出 洋二 [京都府立山城郷土資料館]
岸岡 貴英	向田 明弘	[京都府教育庁指導部文化財保護課]
大東 敬明	李 生智	[國學院大學]
武井 二葉	小林 孝夫	横田 綾乃
栗生 春実	成井 斐南	

## デザイン

自然堂株式会社（竹市絵美）

## 京都の祭り・行事 ー京都市と府下の諸行事

編集・発行 京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会

[連絡先]

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町 394 Y.J.K. ビル 2 階

発行日 令和2年3月31日



本事業は、平成31年度文化庁文化遺産総合活用推進事業（文化芸術振興費補助金）の助成をうけて実施する「京都の文化遺産総合活用推進事業」の一部です。

